

■結成30周年記念座談会■

動労千葉の団結はいかにつくられたか

——『新版 甦る労働組合』をめぐる——

参加者

中野 洋 (前委員長)

水野正美 (元副委員長)

山口敏雄 (元副委員長)

布施宇一 (前副委員長)

田中康宏 (委員長)

繁沢敬一 (副委員長)

長田敏之 (書記長)

座長

君塚正治 (副委員長)

『新版 甦る労働組合』の発刊

君塚 1979年3月30日に動労千葉地方本部が動労本部から分離・独立して動労千葉を結成してから、30年を迎えます。ちょうどこの時、中野常任顧問の著書『新版 甦る労働組合』が発刊されました。きょうはこの本もテーマにしなが、動労千葉の闘いを振り返り、今後を展望していきたい。動労千葉結成から国鉄分割・民営化反対闘争、JR体制下に入り込んで以降の過程を中心に担ってきた世代。そして、2001年に中野委員長から田中委員長に交代して以降、第2の分割・民営化攻撃と対決してきた世代。この二つの世代の三役で、動労千葉の団結はいかにつくられてきたのかを議論したいと思います。

では初めに中野常任顧問から、『新版 甦る労働組合』発刊についてお願いします。

中野 79年3月の結成当時、執行部が組合本部に毎日詰めて、動労本部の動きを把握し、「今日は東京

の連中が新小岩に入った」「今日は成田に来た」などと言いながら各支部の結成大会を次々と開いていったことを、昨日のように思い出します。早いものでそれから30年。当時は自分が書記長で、83年に委員長になり、この30年間、ここにいるメンバーに支えられてやってきた。そして2001年に委員長を退き、世代交代して7年半。動労千葉の30年間の闘いを語ってもらうにはこの新旧三役がいいだろうということで、この座談会を設定しました。

みんな承知のとおり、世界は今、金融大恐慌下にある。アメリカで「金融の神様」と呼ばれたFRB（連邦準備制度理事会）前議長のグリーンズパンが、「自分の認識が誤っていた」と認めて、「100年に1度の大津波だ」と表現した。今も毎日のように何千人、何万人という首切りが新聞紙上をにぎわしている。

だけど、これほどのが起こっているながら、日本の労働組合は何ひとつ反撃しない。だから労働者が好き勝手にやられている。長年労働運動をやってきたわれわれにとって、我慢ならない事態だ。こういう状況になれば、何はともあれ労働者が団結して敵に対抗し



中野洋 なかのひろし

1940年生 79春闘と三里塚ジェット闘争を理由に公労法解雇。元職は千葉運転区運転士〈組合歴〉千葉気動車区支部長、千葉地本書記長（73～79年）、動労千葉本部書記長（79～83年）、同委員長（83～01年）を経て、現在常任顧問

ない限り、問題は一切解決しない。

この本は『甦る労働組合』という表題だけれど、出版記念会で君塚副委員長が「今はまだ『甦らせよう、労働組合』だ」と表現したとおриだと思う。今こそ、労働組合を甦らせなければならない。

自分が委員長をやめた01年に、かねてから懸案だった労働学校を開設して、間もなく8期が終わります。

この労働学校には、動労千葉だけでなく多くの労働者が参加してくれて、非常に評判がいい。なぜかと言えば、労働組合的な言葉が飛び交う場所、「職場でこういう目にあつた」という話ができる場所が、ほかにあまりないから。この労働学校に来た若い人たちが、職

場で労働組合運動を始め、勉強したがっている。だけど、なかなか適当なテキストがない。『俺たちは鉄路に生きる2』は動労千葉の歴史と総括を記した本だから、国鉄労働運動のことを知らない人にはちょっと難しい。その点、『甦る労働組合』は、1995年に発行した本だけれど、労働組合運動について普遍的なことに触れている。ちょうど在庫がなくなっていたので、「この本を増刷して欲しい」と要望されたわけです。

当初は、冒頭に最近の情勢を書いて増刷すればいいだろうと考えていた。だけど、つくり始めたらそうはいかない。サブプライムローン危機に始まって、日本でも総理大臣が1年もたたずに次々変わる。そんな事情で、中身を8～9割がた書き換えることになった。非常に短い時間だったから不十分なんだけど、可能な限り今の状況に踏まえたものにしたつもりです。

この本は動労千葉の30年間の闘いを大体は言い尽くしている。動労千葉が闘ってきた原点や、労働組合は

※動労 国鉄動力車労働組合。国鉄の機関士・運転士を中心とした労働組合。動労千葉はもとは、その一地方本部だった。

どうあるべきなのかということにも触れている。だから特に若い労働者にとっては、偉そうに言えばバイブルみたいなものにしてもらえればいいと思っっている。きょうは、この本もテーマにしながら、動労千葉の過去と現在を指導しているみんなに、「今、労働者は何をしなくてはいけないのか」ということを縦横無尽に語り尽くしてもらいたいと思っっています。

闘いの軌跡① 動労千葉結成まで

君塚 話の皮切りに、それぞれが国鉄に入社したころの職場や動労千葉地本はどんな状況だったのか。自己紹介を含めてお願いします。

水野 俺は山口君と同じ1937年生まれだけど、早生まれだから学年は一つ上。55年に高校を卒業して大学に行こうと思っっていたけど、鉄道員だった親父がその年の夏に亡くなった。それで、兄弟が5人もいるから、「鉄道に入ろうか」って話になって、臨時雇用員として採用されたのが56年4月。保証人は、その時



水野正美 みずのまさよし
1937年生 81年3月のジェット燃料貨車輸送反対ストライキを理由に公労法解雇。元職は勝浦運転区運転士
〈組合歴〉動労千葉地本勝浦支部長、動労千葉本部副委員長(81~89年)等を経て、現在顧問・勝浦市議会議員

の勝浦機関区長。採用試験は、面接で「親父の後を継いで、立派な機関士になるんだね」「はい」、それだけだった。そういう時代だった。

山口 1956年に高校を卒業して、56年5月に国鉄入社。当時は就職難で、国鉄に入るのは縁故関係が強かった。蒸気機関車が主流の時代で、千葉機関区に「庫内手」という職種の臨時雇用員として入って、機関車の掃除から始めた。ちょうど夏の暑い時期に向かって機関車の掃除をやったんで、大変だった。

10月には臨雇のまま木更津支区に転勤になって、57年4月に新小岩機関区で職員に、58年に機関助士になった。それから約3年後、62年に気動車(ディーゼ



山口敏雄 やまぐちとしお
1937年生 81年3月のジェット
燃料貨車輸送反対ストライキ
を理由に公労法解雇。元職は
千葉運転区運転士
〈組合歴〉動労千葉地本千葉
気動車区支部長、動労千葉本
部副委員長（81～89年）等
を経て、現在顧問

ル機関・ガソリン機関などを原動機として自力走行する鉄道車両）運転士。その後、千葉気動車区の中で労働運動に参加するようになった。

中野 59年に国鉄入社。勝浦機関区の臨時雇用員から始まって、61年に新小岩機関区で機関助手。63年に動労千葉地本の青年部長になった。その後、65年に気動車運転士見習として千葉気動車区に転勤して、運転士になった。

布施 61年に19歳で新小岩機関区の臨雇で入った。俺が入ったころは、高度経済成長が始まっていて、千葉は国鉄の中でも経済成長が一番反映したところだった。運転士をどんどん育成していて、資格がついたら

すぐに現場に配置しないと要員が足りない。だから入社から1年半後には機関助手。そのまま67年に24歳で運転士になって、千葉気動車区に行った。

君塚 私が国鉄に入ったのは69年。現場は新小岩機関区の蘇我支区。10月には助手科に入って、70年7月に機関助手になった。だけど、ちょうど機関助手が廃止された直後だったから、資格はあっても仕事がない。「佐倉機関区に行けば、通票取りと客車のSG（蒸気暖房）のボイラーの仕事がある」と言われて、4年半、佐倉機関区にいた。

繁沢 75年12月に臨時雇用で国鉄に入って、76年4月に採用。親も国鉄労働者だった。職場は新小岩機関区で職名は整備係。日勤の「使い番」は、お茶をくんだり、掃除したりする仕事。「起こし番」は夕方か

※通票取り 通票とは、鉄道の単線区間で、1区間に1列車しか入らないようにするため、発駅の駅長が運転士に交付する金属製の通行票のこと。「通票取り」は、急行列車の場合、通過駅での通票の受け渡しは運転士一人ではできないので、運転士とともに運転台に乗った。



布施宇一 ふせういち
 1942年生 動労本部革マルによる80年4・15津田沼支部襲撃事件を理由に日鉄法解雇。元職は千葉運転区運転士
 〈組合歴〉 動労千葉本部書記長（83～89年）、同副委員長（89～99年）等を経て、現在顧問

ら朝までの仕事。新小岩は貨物だから夜中に出る列車も多く、2時や3時に起こす人を含めて一晩で30～40人。今の貨物は機関士の1人乗務だけど、当時は「列車係」という貨物列車の最後尾に乗る人もいたから、その人たちを起こす仕事。

父親が国労組合員で「国労に入れ」と言われたけれど、新小岩は動労しかない。自分でも運転士になりたいと思っていたから、そのまま動労に入った。

田中 僕は高校卒業後、別のところで2年働いて、国鉄入社は76年。津田沼電車区に入ってしばらくは起こし番。約半年で準職員になって、それからは検修に入ったところは、職場は組合が天下取ったみたいな状

況。起こし番の仕事は、泊まり勤務の起こし番と、日勤の雑用。日勤の日は、昼飯を食ったら帰るのが当たり前だった。そんな職場に入ったから、反動的な御用組合を一からつくり直していく過程の苦勞は全然知らない。その代わりにあったのが、青年部における革マルとの激しい衝突だった。

長田 77年に国鉄に入った。入ったのは新小岩機関区蘇我支区。今の千葉機関区だよ。千葉機は今は大きくなったけど、昔は支区だったから小さい職場で、組合は動労しかないから、そのまま動労に入った。

そのころはもう、職場は組合が押さえきっていた。蘇我が戦闘的な支部だったわけでは全然ないけど、今



田中康宏 たなかやすひろ
 1955年生 国鉄分割・民営化に反対して闘われた85年11月ストを理由に公労法解雇。元職は津田沼電車区車両検修係
 〈組合歴〉 本部青年部長、本部書記長（89～01年）等を経て、現在本部委員長（01年～）



君塚正治 きみづかまさじ
1950年生 千葉機関区新小岩
派出運転士
〈組合歴〉新小岩支部書記
長、同支部長等を経て、現在
本部副委員長（99年～）兼動
労総連合委員長（2000年～）

までの経過があるから、当局との攻防なんて全然ない。仕事は整備掛で、掃除と起こし番。あとは飯をつくって終わる感じで、のんびりしてました。

■まったく闘わない組合からのスタート

君塚 60年前後の動労千葉地方本部は、どんな状況だったんですか？

水野 俺が入った56年ころは、まったく闘わない組合だった。入社した年の春闘で、地本から勝浦支部にストライキの打診が来た。たかが2時間の時限ストだ

けど、支部執行部はそれを「やるか、やらないか」と大騒ぎで、職員集会場に組合員をみんな集めた。私は入ったばかりでまだ制服がなくて、詰め襟の学生服を着て行ったけど、どれだけ話をしても堂々巡りで全然結論が出ない。「何かほかに意見はないか」と言われて、早く帰りたいもんだから手を上げて、「執行部は要するに、やる気があるのかなのか、どっちなんですか」と聞いたたら、執行部は答えられなかった。それでごちゃごちゃのまま終わって、あとで聞いたたら「本部にストライキ返上のお願いがあがった」と。そういう労働組合だった。

布施 俺が入った61年ころだって、新小岩機関区でも、組合役員をやった人間が指導員や助役にどんどんなっていた。ストも返上していた。組合の動員がかって、勤務明けに機関士と二人で行ったら、役員が誰もいなかったなんてこともある。水野さんが言った勝浦の雰囲気と、そんなに変わらなかったよね。

君塚 そんな中で、水野さんはどうやって勝浦支部長になったの？

水野 勝浦から転勤して千葉気動車区に5～6年い

て、65年に地元の勝浦に帰った。勝浦で気動車運転士をしていて、翌年に支部の執行委員に初めてなり、教宣部長をやった。67年に、動労本部が全国支部委員長会議を初めて開いた。だけど支部長はやる気がないから、教宣部長の俺に「お前、代理で全国会議に行つてこい」と言われて、会議に参加した。

その会議から帰ってきたら、今度は「お前が支部長になれ」。マル生（生産性向上運動）攻撃で先輩連中がみんなビビって組合役員から逃げた。それで支部長のなり手がいなくて、教宣部長を1回やっただけの30歳で無理矢理、支部長にされた。

支部長になった後、現場長交渉をやるよ、当局側に並ぶのは、ちよつと前まで組合の支部長や乗務員会の役員をやっていた人間ばかり。対する組合側は30歳の若造なんだから、労働組合の体をなさないよね。

その後、間もなく地本から勝浦支部にスト指令が来て、ストに突入したけれど、後ろを見たら執行委員9人しかいない。あとはみんな逃げた。そんな状況から始まった。今そこらへんにいっぱいある組合とまったく同じ、非常に右翼的などころからのスタートだっ

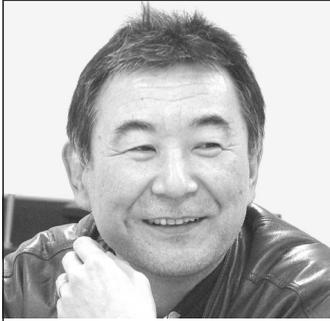


繁沢敬一 はんざわけいいち
1956年生 京葉車両センター
車両技術係
〈組合歴〉本部副青年部長、
千葉運転区支部長、幕張支部
副支部長等を経て、現在本部
副委員長（99年～）

た。ましてや勝浦は千葉の中でも田舎の方だから。

■滝口解雇撤回闘争・反マル生闘争（68～73年）

水野 転機になったのは、68年の滝口誠君（当時、新小岩支部青年部長）の解雇問題だった。これをめぐって、組合が割れた。でもあのころから勝浦支部の青年部は、いろいろな意見はあっても「やっぱり滝口君を守れ」とまとまっていた。あとは72年の船橋事故をめぐる闘争。こういうことをとおして、組合らしくなってきた。紆余曲折はあったけど、勝浦支部は大義は守ったとは思っている。



長田敏之 おさだとしゆき
1958年生 習志野運輸区車両
技術係
〈組合歴〉本部副青年部長、
勝浦支部書記長、総武支
部長、幕張支部副支部長等
を経て、現在本部書記長（04年
～）

中野 滝口君は当時機関助手で、「乗務中にビールを1杯飲んだ」などの理由で解雇。当時の機関区では、夕飯時にビールを飲むくらい特別なことじゃなかった。しかも一緒に乗務していた機関士は、もっとたくさん飲んだのに戒告処分。千葉地本で新興勢力として青年部運動が登場したことへの弾圧だった。

しかもちょうどマル生攻撃が席卷してきた時。マル生攻撃は全国では69年に始まるけれど、千葉では先駆けて68年から始まり、千葉気動車区と新小岩青年部がターゲットになった。ほかには水野さんが言ったようなデレスケ支部で攻撃する必要がなかったけど、二つだけは徹底的にやられた。国鉄本社は当時、千葉気動車

区と東京の田町電車区、京都の向日町運転所の三つを「国鉄三大無法区」と呼んだほど。

あの時に千葉鉄道管理局の局長だった田口が、のちに国鉄常務理事になって千葉に来た時に、「俺は千葉ではマル生攻撃をやらなかった」と威張ってたんだよ。俺が「冗談じゃねえ、俺たちはずいぶんやられた」と言ったら、「お前のところ（千葉気動車区）は別だ。ほかはやらなかった」と言っていた。この反マル生闘争で、またも組合が真っ二つに割れた。それで布施や山口さんは、否応なしに組合運動をやらざるをえなくなった。

山口 そうだな。俺が組合運動を始めたのも、やっぱり反マル生闘争。気動車区ではマル生運動で相当痛めつけられて、仲間意識もなくなって、職場に出てきた乗務員同士が喧嘩するような状況だった。それで、「この職場の状況をどうにかしなきゃいかん」という雰囲気の中で、それまでの役員よりも年下だった世代が組合運動に入っていった。そんな中で、組合活動にはまっていった感じ。

布施 俺が千葉気動車区に行った67年には、マル生

攻撃が始まっていた。当局が生産性向上運動の「生」の字を○で囲んでいたから「マル生」。労働者をマル生教育して、職場の中にマル生分子をつくり、動労や国労から脱退させる。千葉気動車区では、二十数人が完全に当局に手なづけられた。目の前で支部長と副支部長、乗務員会長と副会長が大げんかしているという大変な状況だった。

それで、組合役員でもないのに、「こんなことをやられていたら、毎日仕事に出てきてもおもしろくないから、やめろ」とマル生反対の署名運動をやった。いっぱい集まったよ。みんな、マル生攻撃には嫌気がさしていたから。それで、マル生運動を担った俺らより10歳くらい上の世代が職場にいられなくなった。

中野 それまでは、どこの支部も組合役員を終えれば職制になっていた。だけど当局が「組合役員だった人間を管理職にするのは認めない」となった途端に、誰も組合役員をやらなくなった。気動車区なんて、あつと言っ間になくなった。勝浦もそう。それまで組合役員をやっていた連中が俺のところに来て、「中野、悪いけど支部長をやってくれ」と頭を下げてき

た。そういうやりとりで69年に支部長になった。

布施 上の

世代の人が組合運動から

逃げて、役員

に立候補しな

い。それまで

は、あらかじめ

決まった人が

立候補して

シャンシャン

で承認するだ

けだったけれ

ど、普通に組

合員から立候

補者を募ってやる

選挙になった。

それで山口さんが執

行委員になった。

職場のゴタゴタ

の中で、言うことを



滝口君処分撤回・千葉地本青年部団結集会
(69年2月15日 新小岩機関区)

あんまり曲げないやつが自然に浮かび上がったみたい
なかたちで、俺たちが労働運動に首を突っ込んだ。

山口 俺は70年に千葉自動車支部の執行委員に。

布施 俺が千葉支部の執行委員になったのは71年。

中野 滝口君の解雇問題は、動労青年部の中で大論争になった。当時すでに東京地本の青年部を握っていた革マルは、公然と「解雇された方が悪い」と言ったんだよ。それに対して千葉地本青年部から、「労働者が首を切られたのに、いくらなんでもそんな言い方はないだろう」という声があつと起こった。そういう革マルの主張に、千葉地本の親組合もくつついていながら、そこでやり合いになった。結局、5年くらいやり合ったよね。これが千葉地本をつくり変えていく大きな契機になった。

もう一つは、72年に起きた船橋事故をめぐる闘争。

滝口解雇と船橋事故、この二つをめぐる革マルの対応があり、それで千葉地本が真っ二つに割れた。このことで、組合員にとって問題がはっきりした。

君塚 私が佐倉機関区に行った70年は、ちょうどマル生攻撃のまっただ中。組合はマル生闘争でストライ

キをやるけど、当局と組合が労働者を取り合いっこをしていて、「誰々さんは風呂場から逃げた」なんて話があった。今考えると、千葉地本の中では佐倉支部は右寄りだったみたい。

布施 一番右だった。あの当時は、千葉から下り方面に行くと、勝浦も館山も、木更津みたいな小さいところでも、みんな派閥はすごかった。

中野 成田もそう。そういう派閥を全部ぶっ壊したから、その後、俺が地本書記長になった。

君塚 私もそういう支部の雰囲気にもまれていたから、組合運動を活発にやるわけでもなかった。当時、「千葉自動車区は活発に活動している」とか「気動車区には、中野っていうすごいのがいる」と話ば聞いたよ。でもそれは「だからあまり近付かない方がいいよ」って意味。冗談抜きに佐倉はそうだった。青年部の役員選挙があれば、先輩から「中野一派には絶対に投票するな」と言われる。「中野一派が役員になると、動員が増えるから」と。まだ若かったから、先輩たちの言葉を真に受けてそのとおりにしていた。

布施 千葉自動車区も、マル生闘争をとおして支部

のあり方をつくり変えたよね。それまでは支部長や支部三役が指導員や助役になっていくのがあたり前だった。そういうあり方を吹っ飛ばしたからね。

中野 だから俺は、「敵の攻撃は、常に矛盾をはらんでいるんだ」って言うんだよ。

マル生攻撃は労働組合をつぶすための攻撃だったけど、われわれにとつてみれば、結果としては「マル生様々」になった。つまり当局の攻撃が当時の動労千葉本の右翼的な体質をぶつつぶした。当局の攻撃には、必ず矛盾があるんだよ。

■船橋事故闘争（72年）

君塚 千葉地本全体をつくり変えていくにあたって、72年の船橋事故闘争が大きかったんですね。

中野 72年春に船橋事故が起きて、「高石運動士を守れ」と大騒ぎになったけど、地本は何もやらない。

俺は千葉気動車区の支部長で、勝手に動員指令を出して、高石君が勾留された船橋警察署にみんなで押し

青年部機関紙「動輪」72年10月1日号

掛けて抗議した。この時、革マルはまたも、「事故が組合運動になるわけがない」と言い出した。これでもたみんな、怒り心頭になったわけだ。このころは人手不足で、運動士の養成の仕方が滅茶苦茶だった。高石君もほとんど仕事を教えられていない。停電で信号機が消えた時にはどうするか、教えられたことがないと言う。知らなければ止め

ればいいと言えばそれまでの話だけど、そういう当局の乱暴な運転士育成が引き起こした事故だった。

だから船橋事故闘争を始めた時、地本の中では、どんな右寄りの人間でも、あの闘いに反対しなかった。

たまには「お前らの腕が悪いんだ」と言う人もいたけど、ごく少数。あのころは「腕が悪い」とよく言われたよ。運転職場は職人気質が強いから。

布施 SL（蒸気機関車）をやっている人はそういう傾向が強かったけれど、SLから途中で転換教育をして気動車や電車の運転士になった人はそういうことは言わなかった。SLでは超一流の人も、転換教育で学園に入ると、「えらいきつかった」と言っていた。

君塚 私は、船橋事故闘争も佐倉にいた時代。佐倉支部も組合の動員には参加したけど、近くで頑張っていた人よりはトーンが低かった。

山口 あれだけの大闘争をやりぬいたから、高石運転士に対しては第1審で不当判決が出たにもかかわらず、当局側に刑事休職を断念させて、職場復帰を勝ちとった。毎回の裁判傍聴は、動員指令の1・5倍とか2倍の人数が出てくる。それくらい、組合員にとって

切実なテーマだった。

■関川委員長―中野書記長体制の確立（73年）

君塚 中野さんが動労千葉地方本部の書記長になったのが1973年。

中野 73年9月の地本大会。それまでの地本執行部はグラ幹（墮落した幹部）が握っていて、その中で千葉機動車区や新小岩支部、青年部が中心になって滝口君解雇をめぐる闘いや船橋事故闘争を闘っていた。

一方、70年ころから、千葉地本青年部が動労本部の会議や諸行動に参加するたびに、革マルに激しく暴行されてけがをして帰ってきた。あまりにひどいから、72年に地本青年部が「暴行に対する釈明がなければ、青年部の行動に参加できない」と決定した。すると5月、関東青年部が「千葉地本青年部再建オルグ」と称して、千葉気動車区に約100人で襲撃、青年部員に大けがを負わせた。それまでは「青年部の問題」と思っていた親組合の労働者も、革マルの武装襲撃の実

態を目の当たりにしたわけだ。

そういう中で動労本部は72年9月、革マルのテロ・リンチは一切不問にして、「千葉地本青年部は諸行動に参加しろ」という「組織16号」を発出した。これはあまりにひどいってことで、千葉地本定期委員会が72年11月、「組織16号の再検討を求める決議」を満場一致で可決。にもかかわらず動労本部は73年1月、地本青年部役員6人の組合員権停止を決定した。「これはひどすぎる」という話になったわけだ。

そのことをめぐって開いた地本臨時大会では「青年部への処分を撤回しろ」という決議が圧倒的多数で可決された。本部方針が否決されたものだから、当時の篠原委員長以下の執行部が総辞職。それで臨時大会を4回も開き、9月の定期大会までいった。

水野 その第24回大会は、勝浦の国民宿舎で開かれた。俺は勝浦支部長だったから、大会の準備委員長。

大会では運動方針は決まっても人事が決まらない。中野君が選管に「書記長に立候補する」という届けを出したら、それまでの本部役員は「中野とは一緒にはできない」と誰も出ない。書記長候補以外は、執行委員

候補者が誰もいないんだから、ひどいもんだよね。

宿舎を借りていた時間が過ぎても終わらないもんだから、海のすぐそばの断崖絶壁の「青空会場」で大会を続けた。そこですったもんだの挙げ句、関川幸委員長―中野洋書記長体制ができた。これが、その後の動労千葉のスタート。

中野 俺が千葉地本書記長になったから、その後を継いで山口さんが支部長になった。

山口 そう。それで75年に千葉気動車区が廃止され



春闘集会で訴える山口支部長(74年 千葉気動車区)

るまで支部長。

布施 それと同時に、鶴岡直芳さん（のちに勝浦支部長。86年2月の国鉄分割・民営化反対第2波ストで公労法解雇）が副支部長、自分が書記長になった。

水野 その数カ月後に勝浦では、「動労を脱退して国労に合流しよう」と連判状をつくって国労の旗揚げをした21人衆がいた。みな40歳代後半から50歳代。その時は、支部長の俺も36歳、本部書記長の中野君は33歳。労働組合をつくり変えようとする若手が力を持ってきたことに対する反動だった。それから1週間は大変な闘いだだった。中野書記長も勝浦に来て、支部総がかりで21人を徹底的にオルグした。組合の団結を破壊する動きへの青年部員の怒りもすさまじかった。それで結局、この動きをわずか1週間で完全につぶした。あれで年上の世代をみんな吹っ飛ばして、それ以降は勝浦はだいぶ楽になった。

君塚 75年に機関士になって佐倉から新小岩機関区に転勤したら、組合運動がすごく活発で、雰囲気がいっぱいと違う。それでもそのころ、新小岩支部の執行部は、「あいつは動員に来ないから、役員にしちまう

べ」という感じで、動員に行かない人も含めてつくっていた。だけどそのうち、「役員選挙では、ちゃんと組合運動をやる人を選ぼう」という話になって、それから闘う執行部になっていった。

繁沢 俺は76年に新小岩で組合に入ったけど、組合が当局と対等という印象だった。新小岩には機関士、検修、構内の機関士、機関車の前や外に乗って旗を振る誘導係もいて、組合員が120人ぐらいだった。

■民同労働運動の限界示したスト権スト(75年)

中野 マル生闘争は結局、73年に完勝した。当局が公然と組合脱退を強要していた不当労働行為がばれて、それを国会で追及されたら国鉄総裁が謝罪した。

その後も各地でマル生攻撃は続いたけれど、73年末には完全に決着がついた。マル生闘争に勝ったお陰で、労働組合の発言権がすごく強くなった。だけどそれで、特に国労の中には、自分の力でもないので勘違いして、いい気になったやつがいっぱいできた。

マル生闘争に勝ったから、75年、「官公労の労働者

のスト権を認めろ」という要求が焦点になった。^{※1} 3公社^{※2} 5現業のトップもみんな、「スト権を付与した方がいい」と表明した。それで総評はその気になり、75年11月に公共企業体等労働組合協議会（公労協）^{※3} がスト権ストに突入した。

だけど、自民党はそんな要求には応じない。「ストライキで『法律を変えろ』なんて要求するのは、法治国家にあるまじきことだ」と。確かにそうだ。それじゃあブルジョア民主主義に反するもんな。そして全国の国鉄を8日間も止める大ストライキになったけれど、何もかちとることなく終わった。体制内の民同労働運動の限界を示していたよ。

布施 のちの国鉄分割・民営化に対して国労がまったく闘えなかったのも、俺マル生闘争に勝ったことが底にある気がして仕方がない。マル生に勝った後、国労は「現場協議制」^{※4} をつくったよね。

中野 国労が要求して、鬼の首を取ったみたいにな成果として発表した。

布施 それ以降、国労の現場は現協しかやっていない。大勢で現場長をつるし上げて、それで「勝った、

勝った」、それが労働運動だと思つて育ってきた。だけど、国鉄本社が国労を懐柔しようとしている中で、現場長だって国労の機嫌取りしかしないわけ。あれで国労、とりわけ協会派が腐った。大きい分会の分会長くらいになると、みんなもうおかしくなった。

中野 現協というのは、力でかちとっていない。だから動労千葉は、「現協なんていらぬ。こんな協約なんか結ぶ必要ない」と当局に言った。「俺たちは、こんなものがなくなつてできるわ」と。動労千葉は常

※1 3公社（公共企業体） 日本国有鉄道、日本電信電話公社、日本専売公社。

※2 5現業（国の経営する企業） 国有林野事業、印刷事業、造幣事業、郵便事業、アルコール専売事業。

※3 公共企業体等労働組合協議会 公労法（公共企業体等労働関係法）が適用されていた3公社5現業の9組合（国労、動労、全電通、全専売、全通、全林野、全印刷、全造幣、アル専）で組織した協議体。「春闘の中核部隊」と言われた。

※4 現場協議制 のちに82年、国鉄分割・民営化の動きと合わせて国鉄当局が破棄。

に、力勝負で闘ってきたからね。

■動労本部・革マルとの激闘

君塚 このころに田中委員長や繁沢副委員長、長田書記長も就職して、分離・独立の闘いに関わった。

田中 僕が国鉄に入った76年ころは、動労本部と千葉地本が、青年部問題で大もめしていた時。千葉地本青年部が本部の動員に行くともあまりにもひどい暴力を振るわれたものだから、72年から本部青年部の動員をボイコットしていた。だけど僕が入った76年はちょうど、「乗り込んでいって動労を改革する」と言っていて、動員に出ていく方針を決めたところだった。

中野 「青年部だけにやらせるわけにはいかない」と親組合が先頭に立った。水野、布施が急先鋒。

田中 動労本部青年部の動員に行けば毎回、大激突。それで、入社2年めの77年には「やり手がないから、地本青年部の常任委員をやってくれ」と言われて、常任委員になった。さらに78年には地本青年部の

書記長になり、動労千葉が本部から分離・独立した直後の79年5月には青年部長になった。革マルとの激しい攻防が続いている渦中だったから、「いやあ、大変な時になっちゃった」と思っていた。

繁沢 77年に組合事務所で、青年部の何百個ものヘルメットに青テープを巻いたのを覚えていいる。自分はいきさつでも何も知らなくて、言われたとおりに巻いた。でもそれは、動労革マルが千葉地本青年部に対して「青テープを巻いた革マルのヘルメット



77年4・17三里塚現地総決起集会に登場した動労千葉地本青年部。ヘルメットには青テープが張ってある

トをかぶれ」ってことだった。青年部の先輩たちは、ものすごく悔しい思いで巻いていたんだよね。

その直後に三里塚の全国集会に組合員を何百人も動員して、テープを巻いたヘルメットをかぶって行ったら、周りの参加者からどよめきが起こったのが印象的だった。自分は当時はよくわからなかったけど、周りの人は「え？ 革マルが来たのか？」と思ったらしい。千葉地本だとわかって安心しただろうね。

田中 僕たちの世代は、革マルとの激しい衝突で鍛えられた。あちこちで僕は殴られ役だったよ。

繁沢 当時から田中委員長は目立ってたから。

中野 青年部には「手を出すな。殴られて来い」と言っていたしな。

山口 田中は柏崎で病院に担ぎ込まれた。

田中 そう。あの時は柏崎の原発反対集会に動労青年部の動員が下りた。その会場の中で、青ヘルがもめ始めた。そうしたら、千葉地本青年部はまだ会場の外にいたのに、「お前らが悪いんだ」とぶん殴られた。ぼこぼこにされて、病院に担ぎ込まれた。

繁沢 あの時は、動労本部が動員した青年部員は

庁舎の中の暖かい

部屋に寝たのに、千葉地本青年部だけ機関区の庫くらのピツトの土間に寝させられたのを覚えてる。ただの嫌がらせ。

中野 動

労本部青年部は、原発反対とかいんな理屈で関東青年部を動員した。「千葉地本が出てこなかったら、文句をつけて処分しよう」と考えて。そんなことはわかりきっていたから、親組合も一



動労第101回中央委で、千葉地本の処分に対し、三里塚反対同盟が戸村委員長、北原事務局長を先頭に抗議（78年11月）

緒に行った。

繁沢 78年の津山大会に向けて動労革マルは、水本という革マルが死んだのを「権力の謀略だ」と言って、それを動労の運動方針にしようとした。革マルの運動に動労を利用しようとしたわけ。それで、地本青年部で「歯形」の学習会をやったこともある。水本の死体の歯形がどうのこうのとかが、訳がわからなかったよ。革マルの言うことって本当に滅茶苦茶。

だから動労の新組合員教育に参加すると、休憩時間にいるんな地本が本を売ったりしている場所に行つて、とにかくわあわあ文句をつけた。無内容だけど、「お前ら、みんな革マルだろう！」とか。とにかく許せないという思いでいっぱいだった。

田中 だけど革マルとやり合う以上に、地本青年部の中の方が大変だった。その時の各支部の青年部長は、檜垣さん（のちに本部乗務員分科会会長）や綾部さん（のちに津田沼支部長。85年11月の国鉄分割・民営化反対第一波ストで公労法解雇）、照岡さん（現・いすみ支部長）、そういう世代で30歳近い。こっちは「やる人間がないから」と青年部書記長を押し付け

られた。確かにあのころは、滅茶苦茶なことを言っていたと思う。そんなだから、各支部青年部長が相手にもしてくれない雰囲気。そっちの方が苦労した。

布施 革マルとやり合うと、どうしてもイデオロギー的になる。だけど組織内では、イデオロギー的なことばかり言っているやつは浮いちゃうもんな。

長田 俺は最初のころは、田中委員長みたいにすぐ革マルとガンガンやり合ってたわけじゃない。

国鉄に入って2年目の78年に、蘇我支部の青年部長をやられた。蘇我は小さい支部だから青年部員は4〜5人だけ。それで前の青年部長が、自分が降りたいもんだから、「お前やれよ」と。成り行きでなったようなもので、「労働運動をやるぞ」なんて意識はまったくなかった。だけど動員に出たりしているうちに、田中委員長のお目になっちゃった。（笑い）

田中 あの過程は、毎回青年部の動員に行くのが大変で、それで繁沢や長田、外山（前・本部執行委員、現・本部車両技術分科会事務長）を青年部の役員に引き入れて、ずっと一緒にやってきた。

繁沢 俺は78年秋の地本青年部大会で青年部常任委

員になって、翌79年、田中委員長が青年部長になった時に青年部書記長になった。

長田 今は本部執行委員も各支部役員も、この当時の青年部で鍛えられた世代が中心で担っている。

■本部から分離・独立、動労千葉結成(79年3月)

君塚 こうしたやり合いの中、ついに動労本部が79年3月30日に第104回中央委員会を開催し、千葉地本の関川委員長や中野書記長以下4人の除名、地本執行委員全員の組合員権停止の処分を決めようとした。それに対して同日、動労千葉地本は臨時大会を開き、本部が地本役員の処分を決定した直後に「動労千葉結成大会」に切り替え、まったく同じ役員を選んだ。

水野 それまでの攻防をとおして、動労本部の革マル連中に対する積もりに積もった怒りがあった。だから、「動労の戦闘精神を継承するのはわれわれだ。革マルじゃない」という立場で動労千葉を結成した。分離・独立するだけじゃない、動労大改革を千葉が先頭



動労千葉結成大会で方針を提起する中野書記長(79年3月30日)

に立ってやるんだ、という気概に燃えていた。

中野 当時、千葉地本には約1400人の組合員がいたけれど、その後の激突を経て、約1350人が関川委員長のもとに結集した。動労本部はすぐに「千葉地本再建」を掲げて千葉に襲撃してきたけれど、本部の側に行った連中は銚子支部と佐倉支部のごく一部だ



結成大会を防衛する青年行動隊

け。完全に勝ちきった。

繁沢 俺は分離・独立を前後する過程は3カ月ぐらいい、ちょうど学園に入っていて、職場にいなかった。だから職場の激突はあまり経験していない。動労千葉

の結成大会の時は、青年部が「動労本部革マルが襲撃してくるかもしれない」と構えて、会場の外に防衛隊で立った。あの時は青年部員が約400人いたから、青年行動隊をつくって先頭に立っていた。

◎動労本部が錦糸町駅で青年部を襲撃

長田 俺は分離・独立の後79年に地本青年部の常任委員になってから、革マルとやり合うようになった。

革マルに最初にやられた時のことはよく覚えていて、79年4月11日、明治公園で総評青年協会があって、千葉からも青年部を動員した。その時、青年部の集合場所だった錦糸町駅に先に行って、7人くらいで緩行線のホームで待っていた。

そうしたら1本だけ、すごく混んだ電車が入ってきた。それがみんな革マルだった。500人くらいが電車をわあっと下りてきて、ホームの端っこだいずつ、周りをべったり囲まれてポコポコに殴られた。こっちは無勢だから、かなうわけがない。

あの時は悔しかった。散々やられた後、線路を横断して検査係の詰め所に逃げた。追い掛けてきたやつ

の首つこを捕まえてぶん殴ったら、吹っ飛んで逃げていった。もう革マルへの怒りでいっぱいだった。

布施 指定電車に乗っていったら、ホームは黒山の人だかり、青年部がどこにいるかもわからない。しょうがなくて駅の一番端の検修の詰め所の入り口にバリケードして構えた。結局そこまで来なかったけど。

中野 今になれば笑っちゃうけど、津田沼の組合掲示板に「青年部は錦糸町結集」と動員指示を張っていたわけ。それを見た革マルが動労本部に報告した。

こっちはそんなことを全然知らずに錦糸町に行ったから、駅に着くと次から次へと革マルにぶん殴られた。

君塚 やつらも千葉地本の活動家を知っているから、電車のドアが開くと「あ、あそこにいる」「あれは誰それだ」と名前まで呼ばれて。線路は横断するし、ホームは騒然としていたし、駅は大混乱。

繁沢 俺は小康状態になったところで着いて、1時間近くわあわあ言い合い。動労本部は、「動労から分裂して総評に入っていないのに、なんで総評青年協会の集会に行くんだ」と言ってくる。俺たちは「こっちこそ動労の主流派だ」と。言い合いをしていたら、「連

れて行くぞ」と言われて、ちよつとビビったけど。動労革マルなら顔を知っているけど、あの時は知らない顔が結構いた。学生革マルも動員してきたから。

田中 本部青年部の連中は、「動労から分裂した千葉の青年部を、総評の集会に参加させるわけにはいかない」ということで突っ込んできた。だから集会終了時間が近づくまで、3時間もやり合いが続いた。

中野 革マルは当局とつるんでいたから。あとで聞いたら、現場には動労本部中執の小谷も来ていたし、弁護士も連れてきていた。それで弁護士が錦糸町の駅長室に行つて、「俺たちは動労本部だ。何か起きても俺たちが責任を持つから、お前らは口を出すな」と。錦糸町の駅なんて職員は何人もいないし、やつらは何百人も引き連れているから、当局もビビるよね。

◎津田沼支部襲撃うち破つて支部結成かちとる

田中 津田沼支部襲撃事件（79年4月17日）も大変だった。3月30日に動労千葉結成大会をやった後、各支部の結成大会をやって、動労千葉のもとに結集して闘うことをはっきりさせていったわけだけど、その皮

切りが18日の津田沼支部結成大会だった。だから本部革マルはこれをおつつぶそうとして、前日の17日に職場を襲撃した。



前日の襲撃を打ち破って開催された
津田沼支部結成大会（79年4月18日）

だけどあれも必死で反撃して、1時間くらい持ちこたえた。バリケードをつくって、1階を破られ、2階を破られ、3階を破られ、今度は講習室に逃げ込んでバリケードをつくって、破られて。それでも1時間くらい防戦した。こっちは何も持っていないか

ら、相手が殴ってくる竹竿を引っこ抜いて、それでやった。

布施 あの時はずぐに現場に行った。津田沼電車区の庁舎は駅から結構離れているんだけど、庁舎まで行く道を機動隊が封鎖して、一歩も近づけなかった。

革マルが動労千葉を襲撃するのを、機動隊が防衛していた。とんでもないテロ・リンチが振るわれているのに、絶対に弾圧しない。最後は機動隊に誘導されるように、竹竿を抱えて引き揚げていった。しかも組合員に集中的に暴行したのは、動労革マルではなく学生革マル。動労千葉つぶしのために革マルと権力がつるんでいることが、見え見えだった。

中野 みんな、よく頑張ったよ。片岡支部長は頭蓋骨骨折の重傷を負ったし、ほかの連中も大けが。けど翌18日、ちゃんと津田沼支部の結成大会をやりぬいた。そのことが、ほかの支部にも大きく影響した。

◎各支部結成大会次々と開く

山口 大勢を決したのは、新小岩支部の結成大会（4月21日）だった。津田沼が襲撃されて、新小岩が

襲撃されて、でもこれをみんなしのぎきつた。

君塚 新小岩には動労本部が600人ぐらい、本部青年部長の上野が先頭に立って来た。すごかったよ。

布施 新小岩機関区の講習室の2階で大会をやるから、1階にバリケードを組んで、青年部を配置した。

君塚 駅前には動労千葉の支援共闘の防衛隊がいたけど、本部はそこを避けて機関区を取り囲んだ。

布施 革マルは丸太ん棒を持ってきて、玄関をぶっ壊した。講習室の入り口にあった防火用水をかぶせられて、みんなビチャビチャに濡れて大変だった。組合

事務所の中にあるものは全部持っていかれたし。

水野 それでも2階に立てこもって、やりきった。

中野 あの日は支部結成大会だから、関川委員長が行っていた。それで「本部が来た」と聞いた瞬間に「関川さんを逃がさなくちゃまずい」と思った。委員長を本部に持っていかれちゃう可能性がある。そうになったら大変だと、関川さん救出作戦に行った。うまく逃げることはできなかったけど。

長田 そんな恨みつらみがあるから、各支部の結成大会にも駆けつけて一緒にやったよね。勝浦支部の

結成大会（4

月26日）の時

に、照岡さ

んに「お前ら

も来い」と呼

ばれた。「本

部の連中は観

光バスでカー

テンを閉めて

くるから、お

前、見張りを

やれ」と言わ

れて、興津あ

たりで見張り

をやった。

動労本部は

組合員の家に

も「オルグ」

にと称して個別訪問したから、勝浦の町をかけずり回って、「いたぞー」と本部の連中を捕まえては勝浦

バリケードで支部結成大会を守る青年部
(79年4月21日 新小岩機関区)



機関区に連れて行って、「自己批判しろ」なんてぎゃんぎゃんやった。

水野 勝浦支部の連中も立派なもので、ちゃんと識別する。「お前、どこから来た?」「新幹線」「そうか、じゃあいいや」。新幹線の委員長は一応は反革マルだったから。だけど「高崎地本」なんて答えたやつに対しては、「高崎か、この野郎」と徹底的にやる。

中野 浜に連れて行ってガンガン追及した支部もあった。

繁沢 動労本部の「オルグ」が館山に来た時に、本部執行委員の高橋邦彦さん（のちに85年11月の国鉄分割・民営化反対第1波ストで公労法解雇）と一緒に館山に駆けつけたことがある。千葉から特急で館山に向かい、本部の「オルグ団」が上りの急行で戻ってくるのを途中で待ちかまえた。そうしたら動労千葉の支援共闘の人たちがヘルメットと竹竿で駆けつけてきて、革マルが乗った電車に乗り込んで徹底糾弾。あの時は革マルを完全に圧倒した。最後尾の車両でやり合っていたら、車掌が怖がって降りちゃったもんだから、「とにかく電車を走らせろ」となだめて電車を動かし

たのを覚えている。

水野 俺は成田で、石灰水をぶっかけたことがある。組合員が成田運転区の屋根の上に石灰を混ぜたバケツを並べて構えていた。動労革マルが襲撃してきて、組合員が「やっていいかい?」と聞いてくるから、「やっちゃえ」。本部の連中におわつとぶっかけた。革マルの連中は医者に行って眼帯をまいて、大変なことになっていた。

中野 こういう人が役員だと困るんだよ。（笑い）

あの日は、当局が「成田が大騒ぎ。滅茶苦茶でわけがわからない。なんとかしてください」と電話してきた。「電車は止まらないから、心配するな」と答えたけどね。組合員はちゃんとわかっている、乗務員は出勤するから、電車は動く。だけど当局は「このままいっちゃうと電車がとまる」と思ったんだよ。

君塚 こっちは、点呼をやる場所を変えたりしても、ちゃんと仕事はしていたもんね。

水野 勝浦でも、詰め所で点呼ができなくなっても大丈夫のように、駅で点呼するようにした。俺は駅前にあった旅館に待機して、乗務員を送り出した。

繁沢 印象深いのは会館防衛。74年に全動労が動労本部から分裂した時は、会館を動労本部に乗っ取られたんだよね。だから、今のDC会館の前の動力車会館に、青年部を動員して5〜6人で毎晩泊まり込んだ。

一晩中、入り口の鉄扉の小窓から外を見張った。夜中に、動労本部が「ナーバス電話」をかけてくるんだよ。ウザかったけど、ダメージにはならなかった。会館の中では、竹竿を持って突く訓練とかやって、おもしろかったよ。

布施 革マルは結局、当局と癒着して、その力で動労千葉をつぶそうとした。動労千葉の職場を襲撃したのも、それで列車が動かなくなれば、千葉の管理者が怒られる。そういうかたちで動労千葉を孤立させようとした。冗談じゃないよね。

管理者の中でもまともな人間はみんな、動労本部に反発していた。だからやつらの情報がこっちにどんどん入ってきた。

中野 あの過程で、俺は千葉鉄道管理局長に、「お前らは中立の立場を守るべきだ」という話をした。そうしたら局長は「労労問題については、自分は中立を

守ります」と答えた。だから「俺たちも労労問題に当局を巻き込むつもりは毛頭ないから、電車はどんなことがあっても動かす。心配するな」。そうしたら「電車を動かしてもらえますか」と言われたよ。

田中 電車が止まったのは、4月17日の津田沼襲撃事件の時だけ。

中野 あれは国労の乗務員だから、どうしようもなかった。出勤したら、電車区が襲撃されてガタガタ。それで百本も止まったけど、ほかは、どんな襲撃があっても1本も止まらなかった。全部動かした。

水野 本部の連中だって必死だった。怖かったと思うよ。革マルが勝浦を襲撃した時、動労千葉の支援の部隊が逆襲して、やつらが帰れなくなったこともある。支援の部隊が千葉から外房線で下ってきて、上総一ノ宮駅で遭遇。革マルはもうビビっていたよ。

動労本部にいた連中だから聞くと、やつらの方も大変だったって。「動員に行くたびに『もう行きたくない』って雰囲気まんえんが蔓延まんえんしてきて、しまいには行き手がなくなかった」と言っていた。

『新版 甦る労働組合』を読んで

君塚 ここで『新版 甦る労働組合』の感想を出してもらって、その後の話に進んでいきたい。

山口 よくまあこれだけ調べて本にしたな、というのが第一印象。苦労したと思う。動労千葉の運動、国鉄労働運動を軸に、戦後の労働運動を網羅している。しかも、いろんな激動の中で総括している。本当に苦労した内容が形になっているというのが第一印象。これだけの資料を集めるのは大変だったと思うよ。

水野 俺もまったく同感。よく調べてある。だからこそ、若い人にぜひ読んでもらいたいと思った。

■現実を正しく認識することの大切さ

水野 自分の経験から考えてもそうなんだけど、この本でも現実を正しく認識することの大切さが非常に強調されている。労働組合運動においては、現実

をきちっと全面的に認識することが非常に大事だし、

動労千葉はそれを徹底的にやってきた。毎年毎年、大学教授なんかを講師に招いて、経済学や現代の情勢の学習会をやっている労働組合なんて、ほとんどない。

われわれの時代も、今もそう。そういうふうに、現実を正しく認識するということ、

組合として当然の原則的なことをきちつとやっていく

ことが大切なんだよ。

俺は率直に



国鉄分割・民営化反対第1波スト。職場集会で訴える水野副委員長（85年11月29日 津田沼電車区）

言って、「動労千葉は本当に原則的な運動をやってきた」と思っている。国鉄分割・民営化の闘いの過程では、勝浦でも、現役組合員とかみさん連中を集めて懇談会をやった。家族ぐるみで、国鉄をめぐる現状や、動労千葉がどう闘おうとしているのかという話をして、徹底的に議論してきた。そんなことをやっている組合はほとんどない。

動労千葉のいいところは、そういう原則的なことをきちっとやってきたこと。その積み重ねが今を築いているし、今も生きている。現状を正確に捉えて、組合員と徹底的に討議をする中から、自分たちがどうするかを問う。これからはますます、そういうことをきちんとやらなきゃいけない時代に入っていると思う。

布施 われわれは常に、権力中枢が何を考えているかということを分析して、時代認識を持って、それを職場に行つて組合員に訴えてきた。動労本部から分離・独立する時も、三里塚闘争を闘うにしても、ずっとそういうことをやってきた。

水野 自らの生き様が組合員一人ひとりに問われるようなことを、ずっとやってきた。それにこたえきれ

た労働者が動労千葉に残っている。こたえきれない人間はずつこけた。動労千葉が、今も田中委員長以下びっちり団結してやれているのは、そういうことの集大成。蓄積によって培われたものだと思うね。

分離・独立から国鉄分割・民営化、そして今にいたるまで動労千葉がやってきたことを考えると、周りを見回してもこんな労働組合はない。だから、「原則に立ち返つて労働組合運動をやるう」という時に、『甦る労働組合』は一つの手本になると思う。

そういう意味で、俺は現役労働者、とりわけこれからの現実立ち向かっていく若い人たちに、この本のエキスをぜひ受け止めてもらいたいと思う。

■現場の実践との行ったり来たり

布施 「労働現場での実践が、この本になっている」ことをきちんと見るべきだと思う。動労千葉にも、意気盛んに活動していて、突然いなくなった人間だっている。職場に不満がある時に、職場に行つてその不満と向き合わなかった人間は、情勢が厳しくなる

とダメになった。現場に不満がある時には、役員・活動家と組合員がちゃんと向き合って解決することが必要なんだよ。それをやりきることです役員も期待されるし、現場も納得する。そういうことが原点にないと成り立たない。

この本を読んで、「俺たちがやってきたことが、ちゃんと整理されてわかりやすくなった」と思った。だけど若い人がこれを読む時は、現場で実践して、戻ってきて読む、読んでまた現場で実践する、どっちが先でもいいけれど、その行ったり来たりをしないと物にならないと思う。単に読んで字面を理解するという本じゃない。やはり労働運動は現場だから。

日本の労働運動がダメになったのも、結局は現場が反撃力を奪われたということ。造船重機でも鉄鋼でも、みんな相当な闘いがあった。だけど軒並み労働者が職場の支配権を奪われ、職制からの命令以外は通らないような職場にされた。そういうことをおして、結局は総評も一気にたたきつぶされた。それで、「現場がなくても労働運動はできる」とか、「冬の時代だから闘ってはいけない」とか、とんでもないことを公

然と言う人間が出てきた。その下地になったのは、やはり現場からの反撃力がなくなつたからだと思う。現場で実践して、この本を読む、この本を読んで現場で実践する。

そういうかたちで、若い人たちに学んでもらいたい。そこにこの本の意味があるとと思った。

田中 この本には、「一人よがりになつちやいけない」ということが何回か出てくる。「一人よがりになつちやいけない」というのは、現場の組合員と向



津田沼支部の職場集会で訴える布施書記長(84年)

き合っっていく中で初めてできること。

中野 だから布施君が言うとおり、現場が大切なだよ。そうしないと、一人よがりになる。組合員と相対していたら、一人よがりになってなりようがない。

布施 常々思うんだけど、現場の一人ひとりの労働者は、自分のスタンスをあまり変えない、ブレないんだよ。むしろ運動の側の方が、あっちに行ったりこっちに行ったりする。それは事柄の性質上仕方がない面もあるし、現場労働者だけでは物事は進歩しないという面もある。だけど、現場で労働している人たちの検証を経ないと、ちゃんとした時代認識も持てないし、運動的におおかしくなる。

■現場労働者につるし上げられてこそ

布施 組合運動をやる人間は、現場からつるし上げられなきゃダメだよ。職場に行っつるし上げられることが怖かったら、組合運動なんてやめた方がいい。とりわけ自分よりもずっと年上の人につるし上げられると、もう本当にどうしようもない時もある。だ

けどそういうことを経験するから、本当に考える。

それに比べれば、革マルにつるし上げられるのなんて大したことない。「こいつらは間違っている」と思えば、つるし上げられてもなんてことはない。動員に行った組合員を片っ端からぶん殴って従わせようとする、そんな組織はどうしようもない。

今の田中たちがかわいそうだと思うのは、現場につるし上げられた経験がないこと。つるし上げられると、「自分は正しいことを訴えているのに、なんでつるし上げられなきゃいけないのか」と考えるから。だけど今、労働学校に来ている動労千葉以外の職場の人たちはみんな、職場の中で、俺らが若いころにあったような目にあっていると思う。そういう人らに乗り越えられないようにしないとイケないよな。

■青年労働者のバイブルにしよう

長田 俺は就職した時から動労千葉一本でやってきたけど、書記長になって以降、周りの状況が見えてきた。そういう中でこの本を読んで、一言で言えば痛快

ですよね。「よくぞ言ってくれた」と。

俺たちにとってみれば、今の労働運動の現状はすごく歯がゆい。動労千葉は原則を貫いて闘っているのに、既成の労働運動の幹部たちは、「労働者を踏み台にして自分たちは生き残ろう」なんてスタンス。それに対してこの本は、「こういう時代だからこそ、組合が組合らしく闘おう」と明確に打ち出している。本当に、痛快だと思った。

中野顧問が先ほど、「バイブル」という言葉を使っただけれど、俺も、労働組合運動に携わる人間にとって、この本は本当にバイブルだと思った。

今、JRで働いている青年労働者たちは、革マルの裏切りの歴史も知らずに就職して、就職と同時に、選択の余地なく東労組に加入している。そういう青年労働者がこの本を読んだら、衝撃を受けると思う。

先日、全国労組交流センターが呼びかけた経団連デモに参加して、集会で発言したんだけど、その時、最後にこの本を宣伝した。「『蟹工船』が140万部売れている。『新版 甦る労働組合』がその1割、いや1%でも売れたら、世の中は変わってくる。みんな

この本を広めよう」と。

今、これだけ労働者の立場を明確にして訴えている本はない。労働運動に多少なりとも関わっている人は、この本を読んだら相当な衝撃を受けると思う。そしてそこで得たものが、今後の活動に響いてくる。この本がもし100万部売れたら、本当に革命が起こる。そんな印象を持つ本だよな。

田中 1万部だって大きい。

長田 そう。1%の1万部が売れば、世の中は変わってくると思う。

■職場の現実の中に原則貫く

田中 この本全体に書かれているのは、「労働組合とは何なのか」ということ。これまで労働運動の中で語られてきた「悪しき常識」を全部ひっくり返して、「労働組合とは本当はこんなにすばらしいものなんだ」ということを必死になって訴えている。

これまで多くの労働組合が、現実の職場における困難と労働組合の原則を、ずっと衝突させてきた。

「現実、現実」と言う人間は大体、「現実には屈服するしかない」と言っただメになっていく。他方、「原則、原則」と言う人は、観念論的な急進主義みたいになる。だから、現実の闘いの中に原則が貫かれたことがほとんどない。だけど、それをやるのが、結局は労働組合を甦らせること。二つのことのように対立させるのではなく、でも中間主義的に折衷する（せっちゅう）のもない。職場の現実に対して労働運動の原則をはずさないで格闘する中で、原則ももっと豊かになっていく。それは口で言うほど簡単なことじゃないけれど、実際、動労千葉はそれをやってきた。

そう感じたのは、委員長になってから7年余の経験があるからだと思う。今から振り返れば、委員長になった当初は、やはり本当に責任をとりきるってことがわかってなかった。01年以降、シニア制度との闘いから始まった。「職場の外注化なんか絶対に認められない。だから拒否する」、そういう原則はもろろん確認できるけれど、それを職場にどう貫くのか。そこで本当に確信を持ってやれていなかった。この7年の闘いの中で、「ああ、ようやくわかってきたな」という

気持ちだね。

布施さんが言うとおり、職場で起きることと必死になって格闘して原則を貫くことの困難さと同時に、それをやった時にもすごい可能性が見えてくるということが、ここ数年でようやくつかめた。この本を読んだ、あらためてそう再確認した。

■昔も今もぶれないのが動労千葉

繁沢 俺は実は、どこをめぐっても聞いたことがある。毎月の労働学校の冒頭、中野顧問があいさつして、その時々に来たことを労働者としてどう見るのか、という話をする。その内容のエッセンスが本にまとめられたという印象。委員長を退いた後は、組合員が中野顧問の話を聞く機会は減ったから、労働学校を担当している俺が一番聞いているかもしれない。

国鉄分割・民営化の話も出てくるけれど、昔も今も言っている中身が変わらない。ぶれない。それが中野顧問だし、動労千葉だと思う。

例えば「階級的労働運動とは何か」ということを説

明するのは結構難しい。それがこの本では、「階級に依拠して闘うことだ」と1〜2行で書いてある。「そうか、簡単なことなんだな」と思ったよね。

■「労働運動に人生をかけた」

君塚 俺は今、2回めの途中なんだけど、1回目を読んだ後に、旧版の『甦る労働組合』をざっと読んだ。確かに違う。先ほど中野顧問が「8割がた違う」と言ったとおり、新版の方は、今の時代から見ていることがよくわかった。俺が知らない時代のこととも結構細かく書いてある。それを抜きに今も語れないだろうし、そういう流れの中でこう語っているんだな、ってことがよく見えてくる。

2回目になると、1回目と違うところが気になる。一番気になったのが、「俺は労働運動に人生をかけてきたんだ」ってこと。そういう勝負の仕方をしてきたことが、すごく印象深い。「だからこの本を書いたのか」ということがよくわかる。

「今までの労働組合は、闘うとほとんどつぶされ

てきた」ってことが何度も出てくる。そういう中で、動労千葉はなぜ残ったのかということが書いてある。「迷ったら左を選択しろ」とか。そういう動労千葉の闘いの意味が、あらためてよくわかる本だよ。

俺たちなんかよりも労働運動を語る人はいっぱいいるだろうけど、動労千葉みたいに語れる人はいない。だって動労千葉の場合は、机上の「論」じゃない。動労千葉は現場で実際に闘って残ってきた。この本は、その実践を記した本。「The 動労千葉」。迷った時にこれを読むと、とても楽になる。自分たちがやってきたことが正しかったということが、あらためて確認できる。

だから、今労働運動をやっている人に、ぜひ読んでもらいたい。一番読んで欲しいのは、1047名闘争を闘っている人たち。特に4者4団体（※70ページから詳述）に読んで欲しい。だって1047名闘争がどう進んでいったらいいのか、この本にはみんな書いてある。だからぜひ勧めたいというのが感想です。

闘いの軌跡② 分割・民営化反対闘争を中心に

■ジェット燃料貨車輸送反対闘争（77〜81年）

君塚 その後、水野さん、山口さんは81年3月のジェット燃料貨車輸送反対闘争で解雇された。

山口 成田空港は、開港する前から燃料輸送問題がアキレス腱^{けん}だった。千葉港から成田まで、どうやってジェット燃料を運ぶのか。政府はパイプラインで運ぼうとしていたけれど、それに対して沿線各地で反対運動が起きて、結局、78年の開港までに完成しなかった。それで、千葉港と鹿島港から成田まで、国鉄を使って燃料を運ぶことを決定した。それに対して動労千葉は、77年から78年の開港に向けて、燃料輸送阻止の大闘争を闘いぬいた。

さらに当初は「貨車輸送は3年間」という期限が決められたのに、3年を超えてもパイプラインが完成しなくて、「貨車輸送を延長する」と提案してき

た。「ふざけるな！」ってことで81年3月、指名ストから全線を止める24時間ストまで、1週間にもわたるストライキをやった。

水野 その闘争の指導責任ということでは、俺と山口君、それから西森巖君、吉岡正明君の4人が公労法で解雇された。直前の79年春



全国から6500人が集まった「三里塚空港開港反対・ジェット燃料貨車輸送阻止／動労千葉8・12大集会」(77年8月12日 千葉市公園体育館)

闘とジェット闘争で中野書記長が公労法解雇になったことと合わせて、計5人がこの闘いの関連。

中野 三里塚反対同盟との「労農連帯」をかけた闘いだっただけでもない。同時に、75年スト権スト以降の、日本労働運動を今の連合のようなあり方に変質させていく路線に激しく対決した闘いでもあった。もちろん運転士として、「こんな危険なものを運べるか！」という運転保安闘争でもある。

田中 ここ数年、11月に訪日した民主労総ソウル本部の組合員が、三里塚に行つて反対同盟と交流している。そうすると、「農民の闘いに連帯して労働組合がストライキを打つなんて、想像できない。動労千葉はなぜそこまでの闘いができたのか」と驚かれる。でも僕は、労働組合自身のあり方が問われる問題だったから自分たち自身の闘いとして闘った。

■国鉄分割・民営化攻撃の本質を見抜いて

君塚 国鉄分割・民営化攻撃は動労千葉にとってもやはり大きな波でした。三役として闘いぬいた水野さ

んや山口さん、布施さんからその過程の話を。

布施 国鉄分割・民営化の狙いというのは、中曽根が言ったことに尽きる。「国労をつぶせば総評はつぶれる、総評をつぶせば社会党はつぶれる」。敵はそういう明確な政治的意図を持っていた。にもかかわらず社・共、総評は、そこをちゃんと見ることができなかった。見誤った。それが基本だよ。そこに動労・松崎が食い込んで大裏切りを果たした。それで、国労も総評も一気に崩れた。

※1 動労の大裏切り 動労本部は国鉄分割・民営化攻撃に際して、86年1月に国鉄当局と「労使共同宣言」を締結し、7月に総評を脱退。当局の手先になって国労組合員を脱退させ、さらに自殺に追い込んだり、50歳以上の動労組合員を退職に追い込むなどの悪行の限りをつくした。現在はJR総連。

※2 松崎明 分割・民営化当時の動労委員長。87年にJR東労組会長。07年、JR総連「国際交流推進委員会」から3000万円を横領した容疑で書類送検。ハワイの別荘の購入資金にあてたと見られる。

水野 よく、「なぜ動労千葉だけが分割・民営化攻撃に立ち向かえたのか？」と聞かれるけれど、そんなじゃない。分割・民営化攻撃の質を正確に組合員に訴えてきた労働組合が、いざ勝負の時を迎えた瞬間に日和ってられるか、ってことなんだよ。敵の攻撃ははっきりしていたし、動労千葉はそのことを大衆討議にかけてオルグしていた。そうしたら、「分割・民営化に異議あり！ 労働組合として団結して闘う以外ない」という選択肢しかない。結論が出ている。俺はそういう受け止め方だよ。

動労千葉は「総評や国労は関係ない。俺たちだけ孤立しても闘う」なんてつもりだったわけじゃない。できるだけ国労も引きずり込む、総評も引きずり込む、そのためにも動労千葉が先頭に立って問題提起をする。そういう闘いだっただけ。けっして過激な方針でも何でもない。にもかかわらず、結果としてほかの組合がやらなかったから「唯一」になっただけ。

布施 国労本部の脆弱性だよな。でも、われわれは国労本部を批判してきたけど、国労だけが悪いんじゃない。総評の労働運動全体がそこまで腐っていた。

中野 それとやっぱり、松崎・革マルだよな。

布施 総評にも国労にも、「闘う」という構えがまったくなかった。「お願い」でしかなかった。国家権力が総がかりで国鉄分割・民営化攻撃をかけてきたんだから、そんな構えで勝てるはずもない。それに對して、まともに立ち向かったのが、当時1100人しかない動労千葉だけだったということなんだよ。

国労本部は「社会党をとおして話をすれば、落しどころがある」と心底思っていた。だから国労の現場もやはり、適当なところで収まると思っていた。83年に国労企画部長になった秋山謙祐は、「社会党を中心とした政治闘争」なんて言っていた。それで俺に対して「動労千葉みたいに過激にやったら、つぶされますよ」と言ってきた。「中曽根は本気ですよ」と。そりゃ、本気なのはわかってるよって話なんだけど。

中野 国労は「国鉄の分割・民営化なんてできない」と本気で思っていた。

布施 彼らは結局は86年秋の国労修善寺大会で、組合員に打倒された。でも「国鉄分割・民営化反対」のスローガンを下ろさなかっただけで、それ以降、分

割・民営化が強行される87年4月まで、何一つ闘えなかった。毎月1万人が国労から脱退していったも、なら反撃できなかった。結局は、本質を見る目を持っていなかったということだと思う。

■革同・協会の役員が真っ先に逃げた

布施 あの過程で、革同^{*1}も協会派^{*2}も最後は、支部や分会の役員をそろそろと降りた。「組合役員をやっているとJRに不採用になるから」と。それでは、一般組合員はどうすればいいの、って話なんだよ。

水野 革同も協会もみんな逃げたからな。それを現場の組合員は目の当たりにした。

布施 千葉だけじゃない。全国どこでも、上から順に、責任を取る立場からいなくなつて、最後はみんな役員を降りちゃった。北海道だって、協会や革同の役員は「このままでは不採用になる」ってことで、広域採用に応募して本州に来た。その後に残された労働者が、どんな気持ちになったろうかと思うよ。それで残された一般組合員が1047名闘争団になった。

水野 動労千葉は労働組合として、ダメージを受けることは承知の上で、人間としての生き様をかけた闘いをやった。俺はあとで知ったけど、当時の勝浦支部で、あの過程で自動車免許証を取らなかったのは、俺を含めて5人しかない。あとの組合員はみんな、「たとえここでクビになつたって負けない。タクシー運転士をやっても、家族は食わせていく」と考えていたんだよね。中には大型免許を取った人間もいる。

山口 あの時は、一般組合員がみんな、「われわれはストをやるんだ」と自動車免許を取りにいった。

※1 革同 国鉄革新同志会。そもそもは国労が共産党系と国鉄反共連盟の間で分裂の危機に直面する中で、無党派活動家層によって結成された。1957年国鉄新潟闘争以降は、共産党との結びつきを強め、共産党の国労内フラクションに変質する。ここでの「革同」は、後者を指す。

※2 協会派 社会主義協会派。1951年、戦前の労農派の流れをくむ山川均、大内兵衛、向坂逸郎らによって、「日本社会党の階級的強化を通じて社会主義を平和的に実現させる思想集団」として発足。

君塚 自動車免許と、危険物取扱者免許。

長田 俺は分割・民営化反対ストの時に28歳で、まだ独身だったから、「こんなことに黙ってられるか。別にクビになってもなんとかなる」と腹を固めただけ。大型免許も取ったけど。俺より10歳くらい上、君塚さんの世代なんかの方が、腹を固めるのが大変だったと思う。家庭を持ったり、子どもがいたりして。

繁沢 俺は当時、千葉運転区の運転士。青年部で好き放題の運動をしていたから、自分自身は新会社に残れるとは思っていなかった。

当初は「民営化」と言われても、あまり実感がわかなかった。だけど「ヤミ手当・カラ出張」「国鉄労働者がさぼっているから国鉄は赤字になった」なんてキャンペーンを張られて、それとともに既得権が全部はぎ取られる。国鉄職員が40万人が35万人に減らされ、さらに民営化したら20万人でやるという。社員数がどんどん減って、本当に仕事がきつくなった。そっちの方が実感があった。しかもそのために、3人に1人の首を切るわけだから。「なぜここまでやられなきゃいけないんだ」という思いが強かった。



「11月29日、第1波ストライキを決行する」と宣言する中野委員長
(85年11月17日 日比谷野外音楽堂)

君塚 俺は当時37歳。「仲間を裏切ることではできない」というのが一番の思いだった。だけど職場全体を見ると、俺よりも上の40歳代半ばくらいの方が「動労千葉にいると新会社に行けないんじゃないか」と動揺している人もいた。生活がかかっていったから。

布施 俺は45歳。その世代の方が、いろんな意味できつい。かあちゃんは強くなってくるし、子どもを学校に通わせたりしていて。ただ、景気が今ほど悪くなかったから、「なんとかなる」という思いもあった。

水野 組合員がそういう中で腹を固めたんだよ。ということ、組合員が腹を固めるような、内実のある闘いをやったってことなんだ。

■「分割・民営化絶対反対！」2波のスト決行

山口 分割・民営化反対の第1波ストライキは85年11月29日の始発から24時間決行することを定めた。スト拠点津田沼と千葉運転区で、総武線の緩行線と快速線をストライキに入れる。だけど警察が「ゲリラ対策」と称して、総武線沿線に1万人もの機動隊を配

置、津田沼電車区の周りにはフェンスを張り巡らせて包囲した。しかも動労革マルと国労本部が一緒になってスト破りをする体制を組んだ。こんなストライキ封殺の体制に抗議して、12時間前倒しして、11月28日の正午から24時間のストライキに突入した。

水野 分割・民営化反対の第1波ストライキの時、俺は津田沼電車区に行っていた。そうしたらストライキに突入した2日目の29日早朝、首都圏の各所で国鉄の通信・信号用ケーブルが切断されるというゲリラが起こって、電車が全部止まっちゃった。

そうこうするうちに中野委員長から電話がかかってきて、「職場はどうだ」と聞かれた。それで、そこにいる津田沼支部の執行委員に声をかけたら、「ストライキをやめよう」と言うやつは誰一人いない。「労働組合として『分割・民営化に異議あり』とストライキに立ったんだから、ゲリラがあるうがなんだろうが、俺たちの闘いを終わらせるわけにはいかない」と。「だからストライキを貫徹するべ」、それが現場の結論。意気軒高としていた。俺はびっくりしたけどさ。

繁沢 千葉転支部は28日夜は稲毛の海の家で籠城

がみな解雇された。

繁沢 千葉運転区はスト拠点だから、第1波ストで永田雅章支部長を筆頭に7人が公労法解雇になり、さらに87年2月16日に不採用が通告されて清算事業団に送られたのが5人。合わせて12人、支部役員は全員クビと不採用になった。

俺自身にとっては、支部執行委員になったばかりの後藤俊哉君が首になって、支部青年部長になったばかりの中村仁君が清算事業団に送られたというのが大きかった。俺は本部の副青年部長だったから支部役員をやっていたいなかったけれど、あの2人より3歳上で組合の活動歴も長い。率直に言って「クビにしちゃった」という重苦しい思いは持った。

水野 28人が解雇され、停職ものべ60人。これだけの処分が出ると、犠牲（犠牲者救済規則）も大変だった。1年で億の単位でカネがすつ飛んでいった。「これで組合はもつのか」と思ったほど。だけど、全国の多くの労働者の支援も得て、団結を一つも乱すことなく動労千葉はその後の闘いに進んでいった。率直に思うけど、あそこで動労千葉がストライキに立ち上がら

たことは、日本の労働運動史上に残る闘いだよ。

中野 75年のスト権ストは8日間にわたって全国の国鉄を止めたけど、解雇は15人。それと比べても、動労千葉の28人の解雇は本当に過酷なものだった。当時1100人という小さな組合のストライキが、それだけ大きなダメージを与えたってことの証。

水野 地域に帰れば自民党の選挙運動をやっているような人間が、分割・民営化反対ストライキをやる労働組合の組合員なんだから。だけど組合の中では、闘争が終わってからも、あの闘いに対する批判的な声は聞かないよ。人が何を言おうが構わない。うちの組合員が、圧倒的に「分割・民営化に異議あり」と言っている。闘ったんだから、それでいいんだ。

分割・民営化にいたる過程で、国労組合員が200人も自殺したけど、動労千葉からは一人の自殺者も出さなかった。このことは大きい。労働者の心のよりどころがあったってことなんだ。

布施 28人の公労法解雇は、97年3月に撤回をかけた。裁判を闘っている最中に東京高裁が和解を提案してきたけれど、動労千葉は「和解の前提は、あく

までも全員の解雇撤回」と主張したから、和解なんてするわけがないと思っていた。ところが清算事業団がわれわれの要求を受け入れて、和解が成立した。

28人全員の公労法解雇撤回は、国鉄労働運動の歴史の中でも前例のない勝利。あの過程は1年半から2年くらい、折衝や打ち合わせのために毎日のように東京へ通ったよ。俺は分割・民営化ストの時の書記長だから、この問題に決着をつけるのは当然の任務だと思っ
てやっていたけれど、勝利的和解になって不当解雇を受けた仲間
にそれなりに報いることができて、うれしかったよね。

中野 分割・民営化攻撃だって、当局の攻撃には矛盾があった。それをうまく使って闘いぬいたら、主導権を絶対に握ることはできた。だって、国鉄改革法に「新会社の職員は、国鉄職員から採用する」と書いてある。つまり、よそから労働者を持つてくることはできない。これほど強いものはない。労働組合がちゃんと闘えば、なんだってできた。

■合理化が招いた88年東中野事故

布施 JRが発足した後、88年12月5日に、東中野で運転士と乗客1人が死亡する衝突事故が起きた。12月1日の「ダイヤ改正」で、千葉―三鷹間を3分40秒縮めて、その4日後の事故だった。無理な合理化が招いた事故だったことは間違いない。

繁沢 千葉転では86年1月に永田支部長が解雇になったけど、しばらくは職場に張り付いていた。それでJRが発足した後、87年に新しい支部役員体制をつくった時に俺が支部長になった。それまでの支部役員は、清算事業団に送られたり、本部に行ったり、アルバイトに出たりで全員かわって、支部長が31歳。今、千葉転支部長をやっている大野茂が29歳で副支部長。みんな素人みたいなもんだから大変だった。

そんな中であの事故が起きて乗務員が死んじゃって、職場のみんなもショックを受けた。自分たちも運転しているわけだから。

布施 事故の直後は、職場全体がシーンとしちゃった。あの時、中野委員長と二人で「みんなを怒らせる

以外ない」という話をした。それで俺はすぐに津田沼運転区に行き、区長室に行つて、「運転士がみんな動揺しているじゃないか。このまま放つておいて運転させたら、また事故が起こるぞ。これからすぐ職場集会をやる。30分で終わるから、『布施に脅されたから』ってことでいいから、集会をやらせろ」と言った。



東中野事故の3日後、津田沼支部で緊急抗議集会（88年12月8日）

その時の津田沼の区長は学士出の若いので、顔はもう真っ青。ああいう事故が起きると、現場長は首を切られることもあるから。「私ももうクビかもしれないし、いいですよ」と

認めたよ。

それですぐに職場集会をやつて、闘争方針を出した。そうしたら翌日からぶわつと電車が遅れた。動労千葉だけでなく、JR東労組の運転士もみんな速度を落として安全運転闘争をやつたからね。

中野 あれは遅れるのがあたり前。直前の「ダイヤ改正」で余裕時分を取っちゃつた。

水野 それで東中野事故の1年後、89年12月に、分割・民営化後、本線運転士の初めてのストライキを打ちぬいた。

繁沢 あの時は、ストライキをやるので精一杯だった。民営化されてスト権はあるからクビにはならないけれど、そうは言ってもストライキは大闘争。今までストライキを指導していた人は職場に誰もいない。千

※JR東労組 東日本旅客鉄道労働組合。87年2月、国鉄分割・民営化攻撃を推進した動労革マル・松崎明らが主導して結成。当局と結託して新規採用者を無条件に加入させるため、JR東日本会社の約8割の労働者を組織する。JR総連（全日本鉄道労働組合総連合会）に加盟。

葉運転区にいる約120人の組合員を、どうやる気にさせるのか。みんな怒りもあるし、やる気もあるんだけど、初めて自分たちが先頭に立って闘うわけだから、必死の思いだった。

布施 あの闘いを皮切りに、89年末から90年3月にかけて闘いぬいた結果として、90年4月、1047名闘争が誕生した。

国労は90年に3波のスト方針を出したけど、アリの的だった。2発めは方針をおろして、3発めも戦術を落としてやろうとした。そうやって清算事業団闘争を屈服的に終わらせようという動きに対決して、動労千葉は3月の72時間ストを12時間前倒しして、84時間やった。やっぱり当たり（連休）が出なければ、全国へのメッセージにならないから。

清算事業団闘争をめぐる、「解雇者は1000人程度」とか「いや、500人はいく」とか、いろんな話があった。1000人を超えるとは誰も予想していなかった。だけど90年4月1日に1047名の解雇者が出たことは、すごく大きい。そのことによって、「国鉄闘争は終わった」とは言えない力を持った。

闘いの軌跡③ 第2の分割・民営化攻撃との闘い

君塚 2000年以降、JRでは「第2の分割・民営化攻撃」が襲いかかってきた。ちょうど01年に中野委員長から田中委員長に交代して、新体制でこの闘いを担ってきました。

田中 2001年にJR東日本が「ニューフロンティア21」を出してきて以降、起きていることは、第2の分割・民営化攻撃です。

だけどJRの場合、国鉄分割・民営化反対闘争があり、1047名闘争が続いていることによって、やはり民営化でやろうとしたことが貫徹できていない。外注化なども本格的に進んでない。だからそれを必死になんてやろうとしたという意味で、第2の分割・民営化攻撃は、分割・民営化攻撃の破産の証でもある。

しかもこの間、動労千葉が第2の分割・民営化攻撃と闘ってきて、具体的な成果が上がるようになっていく。JR東の中で唯一千葉だけが外注化を止める、安

全運転闘争をおして線路を改善させる、幕張事故で運転士の解雇を阻む、等々。要するに分割・民営化攻撃が、革マルと結託することによって成り立ってきた労務政策を含めて、実際には完全に破綻している。だからここは勝負のしどころです。

長田 田中体制になってからの7年間は、できすぎだと思っている。本来こんなうまくいくわけがない。やはり中野委員長時代から続く動労千葉の闘いがあるから、今の勝利がある。中野委員長時代は、首は切られるし、強制配転から何から何まで、ある意味ではやられ放題だった。だけどその中でも原則を曲げず、組合員を徹底的に信じ切ってやってきた。それが今の田中体制になって生きていくとつくづく思う。

シニア制度との闘い、外注化、幕張事故、館山運転区廃止、みんな勝てる条件があらかじめあったわけでもない。なのに、俺たちがこれだけ当局を圧倒している。なぜかなって考えるんだけどね。

一つには、当局は労働者を職制にどんどん吸い上げていくわけだよ。だけど、千葉では動労千葉があつて、少なくとも運転職場では、労働者が動労千葉

のもとに団結している。昔は当局が「動労千葉ばかり人材を押しえちゃっている。少し回して下さい」と頼みに来たという話を中野顧問に聞かされてきた。それで「じゃあ誰が欲しいんだ。名簿を持ってきたら全部やるよ」と言ったのに、結局、誰も職制にならなかった、と。今の現場の管理者を見ると、職制としての能力も、仕事自体の技術もない。結局、いいタマはみんな動労千葉が取って、今の区長なんかは組合を裏切った人間ばかり。そういう中で力関係が、俺たちの世代でもまだ残っている。

そんなことも含めていろんな積み重ねがあつて、今の勝利がある。だから、俺たちの世代がつくった勝利でもなんでもない。07年の定期大会では「分割・民営化攻撃にわれわれは勝利した」と宣言したけれど、驕ることじゃない。

中野 長田が言ったことは重要だよ。労資関係というのは力関係だ。力関係には、もちろん数の問題がある。だけどそれだけじゃない。政治的な能力、その他さまざまな能力の問題がある。そういうレベルで、やはり動労千葉は当局をまだ完全に圧倒している。

資本家はもちろん少数派。だけど、やはり人間がやることだから、ある世代の人間が、労働組合と経営者のどちらの側に行くのか、という問題がある。その世代の中心に立つ人間がみな経営者の側にとられた場合は、結構怖い。だけど動労千葉の場合は、俺たちの世代から国鉄最後の世代まではみんな、動労千葉が全部

いいタマをとっている。だから当局はどんなに頑張っても動労千葉には対抗できない。車両の技術的な問題とかいろいろなことについて、まだまだわれわれの方がやれる。この関係は簡単には崩れない。そういった意味でも、われわれの優位な点を發揮して、その上で新しいものをつくっていくということだと思う。

田中 そうだよな。しかもこの第2の分割・民営化攻撃との闘いをおして、1047名闘争も含めて、勝てるチャンスが出てきている。

しかも今、労働者全体が置かれた現状と、国鉄分割・民営化以来20年間闘ってきたことが、結合できる情勢がきている。そこをちゃんと見て闘うことが決定的。そのことを国労なんかは見るができない。

この本にも、「どんな小さな労働組合でも、労働者

全体のこと、労働運動全体のことを考えなければダメだ」と書いてある。そこが問われていると思う。

■基地廃止反対闘争で団結つくる

君塚 動労千葉は、理屈だけで闘っているのとも違う。実際に闘うと、想定外のことがいっぱい出てくる。だから、それに対する知恵もまた出てくる。その積み重ねだね。

長田 闘い方はストライキだけじゃない。ストライキは最後の最後。そこまでの過程が大事なんだよ。現場ができない方針を本部が出しても意味がない。

07年3月の館山運転区廃止をめぐる反対闘争でも、職場で膝をつき合わせて「本部はこう考えているけど、お前らはどこまでできるんだ」と議論した。やはり現場に行つて、組合員ととことん議論すること。それで納得すれば、「じゃあそれで行こう」となる。その過程がすごく大事。

君塚 あの闘争はある意味、当局との関係では運転区廃止は絶対避けられないという前提があった。だけ

ど本部と支部がとことん格闘して、「それでも闘いぬく」という方針を決めて闘った。それが大きかった。

田中 この1月に毎年恒例の動労千葉全支部活動者研修会をやった。交流会で、今は本部執行委員をやっている山田繁幸君と話したら、「今になって考えると、館山運転区は廃止になってよかったと思う」と言うんだよ。「廃止にならなかつたら、自分もこんなに組合運動をやっていなかつたし、館山支部には積極的に組合運動をやるうなんていうやつはほとんどいなかった。だけど運転区が廃止になるって時にみんなで頑張ったから、木更津に来てからもみんな頑張ってる。本部に『できることは何でもやれ』と言われた時は『ええ？ そんなこと言われるのかよ』と思ったけど、今になってみたらそれがよかった」と。

館山運転区廃止からもう2年もたつて、そう言える。俺はこの話を聞いて、「館山運転区廃止反対闘争は本当に勝った」と思った。

長田 労働者の誇りを持ったからだよ。アメリカの労働者がよく言っている。もう60年も70年も前の先輩たちの闘いを、いまだに自分たちの闘いみたいに誇り

高く語る。そういうことなんだよな。

田中 同じなんだよね。

繁沢 館山支部の執行部は、堀江支部長も含めて役員をやったこともない人がほとんどだった。堀江さんも千葉転で分割・民営化反対ストライキはやっているけど、それでも支部長として先頭を切つて闘うのは大変なこと。それでもあれだけの大闘争ができるのが、本当にすごいと思った。

中野 堀江
君や山田君た



運転区廃止反対ストのただ中で、館山から合流した組合員とともに木更津支部臨時大会。「最強の支部つくると宣言(07年3月18日)

ちが腹を固めて「本部の方針でやるべ」と思って、支部の組合員をまとめた。だからいい闘いができた。

1995年の勝浦運転区の廃止の時もそうだった。

あの時は組合員がみんな、へそが曲がっていて大変だった。だって、運転区廃止に鉄道運行上の合理性なんて全然ない。組合員はみんな、「動労千葉がストライキばかりやっているから廃止になる」と思っている。しかも、それはほぼ事実なわけ。だから「どうせストライキを打つても、廃止が撤回になるわけがない」と後ろを向いていた。

それに対して本部は、「悔しいじゃないか。やることを全部やろう」「水野さんの勝浦市議選もやろう」といろいろ提起した。だけどある組合員が「今さら何やったってしょうがない」と言う。だから俺が「ふざけたことを言うな。動労千葉の拠点が廃止されるっていうのに、反撃もしないで泣き言を言っているのか。それならいいよ。お前らがストライキをやらないなら、本部は一銭もカネを使わないで済む。やるべ、やめるべ」と言ったら、その組合員は「俺はそんなこと言っていないよ」と言い出して。それで何を

言うかと思ったら、「1日のストライキじゃ嫌だ」。

「じゃあどれくらいやったらいんだ」と聞いたら、

「2〜3日はやらなきゃ気が済まない」。「それなら」ってことで、95年12月1日の勝浦運転区廃止に向けて、11月末から3日間のストライキをやった。お陰でずいぶん損したよな。(笑い)

結局、そうやって闘ったからよかった。闘わなければ、勝浦支部の団結もバラバラになっていたと思う。

■拠点職場を奪っても、団結は奪えなかった

中野 俺は若いころ、「総評労働運動の7不思議」とよく言われた。動労本部からの分離・独立の時も、総評は「理は千葉にあっても、動労本部に勝てるわけがない」と言っただけ、千葉地本は分裂せずに動労千葉に結集した。そんなことを含めて、期待を裏切っているいろいろやってきた。

もう一つ、動労千葉は拠点職場をほとんど奪われてきた。昔からの動労千葉地本の拠点職場、つまり勝浦機関区、館山機関区、佐倉機関区、成田機関区、新小

岩機関区、これらはこの20年間で全部つぶされた。今残っているのは、元々は支区だったところばかり。今の銚子運転区は、以前は佐倉機関区銚子支区だった。今の木更津運転区は、千葉気動車区木更津派出所だった。千葉機関区が今ある蘇我は、新小岩機関区蘇我支区だった。あと、新しくできたのが千葉運転区と幕張電車区。昔からの拠点職場はみんなつぶされた。

しかもどの職場も、鉄道運行上はつぶす理由などない。成田だってあそこに運転区を置いておいた方がよほど効率がいい。だけど当局は意地になって成田を廃止した。動労千葉のジェット燃料貨車輸送反対闘争の大拠点が成田だったからだ。勝浦運転区を廃止して鴨川に運輸区をつくる必要もまったくない。館山もそう。なぜこんな非合理的なことをやるのか。どこも、動労千葉の拠点職場だから職場がつぶされた。

だけど、それだけ職場を蹂躪じゅうりんとんされても、組織が動揺しなかった。職場を奪うという大変な攻撃をすべてうち破ってきた。これは非常に大きいことだと思う。

労働運動の歴史を見ても、拠点職場が奪われるダメージは相当大きい。そのことで多くの労働組合がダ

メになった。だけど動労千葉はその大攻撃にみんな耐え抜いた。こういう労働組合は、ほかにあまりない。

さっきの山田の話は象徴的。それまでの館山支部は、「勝浦運転区は動労千葉の拠点だからつぶされた。下手すると館山もつぶされる」ってことで、おとなしくしていようと考えていたんだよ。しかもそれは結構リアリティがあった。だけど、いよいよ運転区廃止攻撃が出てきた時に、館山の数十人の労働者が団結して闘いきった。それでみんな変わった。これは、彼らのこれからの人生にとって大きなことだと思う。

田中 当局は、動労千葉が圧倒的多数派だった館山運転区を廃止して、新設した木更津運転区を「モデル職場」にしようと考えていたけれど、それが2年たっても、まったくそうならない。

長田 木更津運転区では組合員がガンガンに元気で、しかも平成採の青年労働者まで動労千葉に獲得した。当局にとっては、これはたまったもんじゃない。

布施 基地廃止反対闘争で一人ひとりが自己変革したことが動労千葉の運動をつくってきたというのは、確かにそう思う。俺自身も、千葉気動車区廃止の時、

さんざん駆けずり回った。一人ひとりの労働者の生活は、気動車区があることで成り立っている。いよいよ廃止になる時には、一人ひとりに「お前はどこに転勤したいんだ」と聞くしかない。その時に、どうしても返事しない人が何人かいる。よくよく聞いてみると、「障害者」を抱えていたり、家族の問題があったりする。そういうことは、普段は出てこないけど。

館山も勝浦も、一人ひとりの労働者にとっていろんな問題があった。だけどそういう問題をぶつける組合があったし、組合がきちんと受け止めてやり遂げたから、今がある。

■「反合・運転保安確立」貫いた幕張事故闘争

布施 もう一つ、動労千葉にとって大きいのは反合理化・運転保安闘争。自分の経験から言うと、こっちの方が大きいと思っている。俺たちの世代で言えば、船橋事故闘争をやる前とやった後でははっきり違う。

97年10月に大月事故^{*1}が起こった。JR東労組は「責任追及から原因究明へ」と言って当局の責任を一切追

及せず、当該運転士にすべての責任を押し付けてJRから追い出した。2005年4月に尼崎事故^{*2}が起こった時は、当局の合理化攻撃がこれほどの事故を引き起こしたことは、歴然としていた。東中野事故も大月事故も尼崎事故も、本質はみんな同じ。

これほどの事態に対して、労働組合がどこもまったく闘わない中で、動労千葉だけが安全運転闘争に原則的に取り組んできた。

04年以降、線路の改善に取り組んできた。だけど組合員が反合・運転保安闘争を本当に自分の問題として受け止めたのは、やはり06年4月に起きた幕張構内事故^{*3}の問題で徹底して闘ってクビを阻んだ時だと思う。

一同 それはそうだ。そのとおり。

布施 あの時、組合員の運転保安闘争に対する受け止めが違ってきたと感じた。すでに前年には、JR東労組の青年労働者が運転台で携帯で1回メールしたただけでクビになっていた。そういう中で、事故を起こした組合員をクビにさせなかった。船橋事故闘争と同じように、組合員にいい意味での影響を残したと思う。

長田 あの時も、事故を起こした当初は職場は重苦

しくて、組合員の中に「ああ、やっちゃった」みたいな雰囲気蔓延していたのは事実。だけど、「そうは言っても労働者がやった事故に対して、このままでいいのか」と問い、反合・運転保安闘争路線をあらためて考える中で、「責任は当局にある」と



「処分された仲間を守りぬくぞ」と抗議(06年9月29日幕張)

ばしつと田中委員長が言い切った。その途端に職場の雰囲気が変わった。本部の責任が大きかった。

田中 本部も「一切の責任は当局にある」と言い切ること自身が大変だった。なかなか簡単に言い切れる雰囲気じゃなかったから、それに負けていた。だけどそこから何回も議論

を重ねて、「運転士には一切責任はない」と言い切った途端に、職場は変わった。

あの闘いに勝ちきって、あらためて、運転保安闘争の重要性が組合員に入った。

布施 01年の世代交代から7年の間に現執行部は、基地廃止の問題と運転保安闘争という、動労千葉にとってとても大きい二つのテーマの闘いをやりきった。その闘いがこれから『甦る労働組合』が提起していることを実践していく基礎としてある。そのことについて現執行部は自信を持っていると思う。

※1 大月事故 97年10月12日、中央線大月駅を通過中の特急列車に入換車両が衝突し、62人の乗客・運転士が重軽傷を負った。

※2 尼崎事故 05年4月25日、JR西日本・福知山線の尼崎駅〜塚口駅間で起きた列車脱線転覆事故。運転士・乗客107人が死亡。

※3 幕張構内事故 06年4月6日、幕張車両センターの構内で起きた脱線事故。当局が構内の安全対策を放置し続けたことにより起きた。当局は当初、懲戒解雇も策動していたが、出勤停止15日に。

国際連帯闘争の大前進

君塚 03年以降、アメリカ・韓国の労働組合との国際連帯闘争が前進してきました。

田中 動労千葉が、全日本建設運輸連帯労働組合関西地区生コン支部、全国金属機械労働組合港合同の2労組と一緒に11月に開催している全国労働者総決起集会に、アメリカと韓国の労働組合が初めて参加してくれたのが、03年です。それから5年。08年の11・2集会には、韓国からは42人も代表が参加してくれた。韓国民主労総ソウル地域本部、アメリカのILWU（国際港湾倉庫労組）を中心に、毎年、中身の濃い国際連帯行動が広がっています。

ですが、これは動労千葉が「国際連帯を始めよう」と考えて始まったわけではない。動労千葉はただただ、職場で原則をつらぬいて闘ってきただけ。三里塚ジェット闘争や分離・独立闘争、国鉄分割・民営化反対闘争、こういう闘いを職場で必死になって闘ってき

た。それが結果として、アメリカや韓国の最も戦闘的な労働組合と結びついた。

しかも付き合い始めてみたら、思いもしなかったほど、動労千葉がやってきた闘いを評価してくれた。そういうことをとおして、僕ら自身が、動労千葉がやってきた闘いの意味をあらためて再確認した。そして、動労千葉が確信を深めただけじゃなくて、あまり威張って言うつもりはないけれど、アメリカの労働者にも、韓国の労働者にも、動労千葉が影響を与えている。そういうことが大事だと思う。

長田 しかし、あらためてびっくりするよ。千葉の片田舎のこんな小さな組合が、今や外国の労働組合からこれだけ評価されている。

繁沢 当初は「ちょっと見にきたのかな」程度で、こんなふうに発展するなんて想像もしなかった。それが何年も続いて、組合員も国際連帯が大事だということとがわかってきた。国鉄分割・民営化から20年たつけど、動労千葉の闘いは日本国内では結構無視されている。だけど原則を貫いて闘ってくると、20年もたつてから認められるってことがあるものなんだね。

中野 動労千葉の中では当初は、「国際連帯？ そんなことをやっている暇があるなら、職場のことをやれよ」という意見の方が多かった。ある意味で当然だと思っただけ、やっぱり違う。現場の雰囲気もだんだん変わってきた。「そうか、俺たちがやっていることは、アメリカや韓国でも評価されているのか」と感じてきた。そうなれば、悪い気がする組合員はいない。重要なことだと思う。

田中 戦後の日本の労働組合もずっと、いろんな人たちで国際交流事業をやってきた。だけど今までの多くの国際交流は、現場の運動とは関係なく、外国の労働組合の名の通った役員を日本に呼んで、講演させて人集めに使うとか、そんな程度のものであった。

動労千葉の国際連帯闘争は、今まで日本の労働運動の歴史の中にまったくなかつたもの。現場ぐるみの付き合いをしている。そういう雰囲気だから動労千葉の組合員も、現場はこれほど厳しいのに、国際連帯闘争に取り組むことに納得している。

さらに08年秋からは、民主労総ソウル本部と「社会主義をみざす理念交流をやるう」というところまで話



5700人が集まって開催された「11・2全国労働者総決起集会」後、日米韓3カ国の労働組合代表が先頭に立って銀座デモ（08年11月2日）

が進んで、日本と韓国でそれぞれ1日とって、「理念交流」を実現した。これからどうなるか予測もつかないけれど、これ自体が今の情勢の中ではすごい大きな可能性を持っている。

中野 そういふ話になると、動きが早い。ILWUローカル10のジャック・ヘイマンは、「帝国主義戦争に反対し、私たち自身の利益のために闘う労働者階級の党が必要だ」と訴えて、そのためにどうやって闘いを進めようかと本気で考えている。

それで、いろんな国の労働組合指導者に、動労千葉のことを「日本には、民営化と闘って勝利した労働組合がある。知っているか？」とパンパン宣伝している。突然、イタリアの労働者から動労千葉にメールがきて、「お前らの綱領をよこせ」と言われたりする。

田中 「ジャック・ヘイマンから動労千葉の話聞いた」とメールしてきた。港湾労働者の労働組合の主導権を握っている、現場労働者に根付いた勢力。

中野 ジャック・ヘイマンやILWUは、労働組合も握っていないような勢力は相手にしない。そのスタンスははっきりしている。

田中 フィリピンからも突然メールが来た。これはJR東労組がらみ。「JR東労組がフィリピンに民営化を輸出しようとしている。しかも多額の金を使ってやろうとしている、大問題なんだ。だから民営化と闘った動労千葉と話がしたい」と書いてある。

長田 革マルは国内で通用しなくなってきた分、外国の労働組合をちよるまかそうとしている。しかもカネを使ってそういうことをやるから、たちが悪い。

田中 僕はこの1月に、民主労総ソウル本部に呼ばれて、ソウル本部の大会に参加してきた。この大会でイジェヨン本部長が退任して、ソウル地下鉄労組出身のチェジョンジン氏が新本部長になった。07年の11月労働者集会に訪日団団長として参加した人です。大会では、動労千葉に「感謝牌^{はい}」を贈呈された。

大会翌日、「新旧三役が集まって引き継ぎをやる場に参加してくれ」と言われたんだよ。「いいんですか？」と聞いたけれど、「いや、参加してもらわなかったら意味がない」と言われて参加した。そうしたら、引き継いだことというのはなんと、「動労千葉との関係を絶対に強化しろ」「JR総連・革マルにだま

されるな」、この二つなんです。

その時に、「動労千葉は400の小さい組合だけれども、連合以上の力を持っている組合だから、この共闘関係は大事にしろ」という話をしている。いや、すごいことを言われているなあと思ったけど。

中野 「400人しかないけれど、いざとなったら5000人の労働者を集める力を持っている」ということなんだよ。

ソウル地域本部も、自分のところの組合員だって動かないと格闘している。それなのに、よそ様の組合員を、ゼニも一銭も払わないで北海道から沖縄まで含めて5000人も集める。「こんな組合はない」と言うんだよ。

長田 一銭も払わないだけじゃない。全国から、自腹で何万円もかけて集まってくれるんだから。

中野 だから彼らは、韓国のメディアに「動労千葉というのは日本では過激派の少数組合だ。ソウル本部はなぜそんな組合と付き合うんだ」と質問されても、堂々とそう答える。

田中 今回の韓国行きで思ったけど、民主労総の運

動は本当にピンチ。民主労総中央の大会にも参加したけど、代議員が定数1000人のところ600人ぐらしか集まらない。左派が抗議してボイコットした、とかいうわけじゃない。左も右も求心力を失っている。相当鋭い対立議案があるのに、議論が夜遅くまでなったら代議員がボロボロ帰っちゃって、採決の時には400人しかいなくて流会になった。これは本当にピンチだと思った。

中野 民主労総はつい数年前までは、大会で左右が徹夜でぶつかって、大激突してやりあっていた。日本も総評時代は、日教組なんかも、大会で徹夜で大激突したりしていた。そういうことをやっているうちは、その労働組合は元気なんだよ。闘争になる。

田中 そういうこともなくなつた。こうなつてくると、JR総連が与える悪い影響は重大になってくる。そのことに、ソウル本部はすごく危機意識を持っている。だから動労千葉に問題を投げかけてきているというところがよくわかった。

平成採獲得・組織拡大へ総力を

君塚 ここ数年、「組織拡大を最大のテーマに」を掲げて闘ってきた、6人の「平成採」^{*}の青年労働者が動労千葉に加入しました。

山口 これからの課題は、動労千葉に入ってきた青年労働者を、どう育てていくのだったことだ。

新しい組合員は今、意気軒高と頑張っているよね。こういう雰囲気をどんどん広げて、さらに組織拡大を実現するためにも、青年組合員もこの本を読んで欲しい。動労千葉のいいところを、どんどん若い人につないでいくステップにして欲しいと思う。

中野 先輩たちのいいところは吸収した方がいい。悪いところは吸収しないです。（笑い）

長田 今、6人の平成採が入ったと喜んでいるけれど、こんな人数では、これから退職を迎える人数には追いつかない。

当局は「そのうち動労千葉は職場からいなくなる。

年が経てば解決する」という腹でいた。そういう中で青年労働者の加入は、当局にもう1回火をつけることになる。今、千葉の各職場の現場長に、県外から労務政策の専門家を送り込んできている。「動労千葉は放っておけばいい」ではなく、「これまでどおりの動労千葉への対応ではいけない」と考えている。そういう中でどうやってさらに組織を拡大し、もう1回職場支配権を奪い返すのか。6人は核心的な部分。これから先へ踏み越えることが最大の課題だ。

だけど動労千葉は今まで、日本の労働運動の常識を全部ひっくり返してきた。壁が高ければ高いほど燃えるところもある。これまでの歴史に驕ることなく、原則を貫いて闘う。飛び抜けた名案があるわけじゃない。職場で地道にこつこつやって、一人ひとりの心に響く訴えかけをしていくしかない。ここが本当に勝負。先輩たちが闘いぬいて、これだけの労働組合を残してくれたわけだから、それを引き継ぐのが俺たちの最大の使命だと思ってます。

水野 今は本当に、労働者の人間的生き様が問われる時代に入った。もちろんわれわれの時代も、そう

いう課題はあった。マル生の時も、分割・民営化もそう。だけど今はそれこそ、運転士になっても駅に吹っ飛ばされる時代でしょ？ 今の政治経済情勢の中で、JRの平成採だって人間としての生き様が問われる状況に入っている。ある意味では、これはチャンス。

長田 JRも当初は、動労千葉や国労を差別の対象として、JR東労組の青年労働者はちやほやしていたから、昇進試験を受ければ一発で受かっていた。だけど今はもう、東労組にいても何のメリットもない。昇進試験を受けてもなかなか受からない。そりゃそうだよ。平成採があれだけ増えれば、その中で選別が始まる。だから「東労組にいれば安泰」なんてことはない。そのことは平成採自身を感じている。

それに加えて、今度はライフサイクル攻撃で、運転士が駅に飛ばされる。「俺たちはこの先、どうなっちゃうんだ」という意識も芽生えてきている。当局の攻撃があつてこそ、こっちが訴えかけるのに好都合だし、それが平成採に響く。

水野 今までは「あと5年たてば何号俸になる。10年たてば賃金はいくらになる」という人生設計を描く

ことができたかもしれないけど、そんなものが全部根底から吹っ飛ぶ時代。つまり、労働者一人ひとりに人間としての生き方が問われる時代に入った。

それにこたえて動労千葉に結集してきた今の平成採は、本当にいい部分だと思う。時代も、これをさらに組織を拡大していくチャンスになってきている。

中野 これも奇跡だ。今どき、動労千葉に入るんだから。あいづら、よっぽど変わってるよ。(笑い)

山口 あの青年たちは、組合のいろんな集会や会議に出てきても、全然平気でしゃべる。すごいよな。

君塚 そうなんだよ。「いきなり来て、なんでこんなにしゃべれるの？」と思うほど。

繁沢 みんな、動労千葉に入るまでに悩んで考えてきているから、考え方が本當にしっかりしている。

中野 みんな口々に「なぜ自分は動労千葉に入った

※平成採 分割・民営化の過程で、国鉄は1982年を最後に新規採用の募集を停止した。87年にJRが発足し、89年、つまり「平成」になってからJRが社が新規採用をスタート。そのためJR職場では、JR発足後の採用者を「平成採」と呼ぶ。

のか」ってことを正面から話す。大したもんだ。

ある平成採の組合員は、生意気にも俺と松崎を比べる(笑い)。「松崎はどうで、それに対して中野顧問はどうで」なんてことを言う。それで「俺は松崎を絶対に許さない」と怒りを持って話す。物怖じしないし、大したやつらだ。

長田 やっぱり現場の組合員の頑張りがあったから組織拡大が前進した。それぞれの支部が青年たちを1年とか2年、3年もオルグして動労千葉に獲得した。そういう下地があったから、いざ入った時には、しっかりした人間ができあがっていた。そうでなければ、あんな関係が生まれるわけがない。

田中 「組織拡大を最大の課題に」とゴリゴリ言い始めて5〜6年たつ。でもやっぱり大変な課題。だから、組織拡大に本気になる組合員がこの5〜6年間で生まれたのが最大の成果。その結果なんだよね。

今はまだ6人だけど、彼らなりに、本当に生き様をかけて決断して、動労千葉に入ってきている。ある平成採は、「動労千葉に入ることを決断した」って時に、僕らのところに仲間を連れて来た。それで、「俺

は動労千葉に

入ることを決

断したけど、

お前らはどう

なんだ」って

話をする。そ

ういう決断の

仕方をする。

本当に真剣な

んだよね。

繁沢 今の

世の中を見て

いたら、JR

も安泰なわけ

がない。だけ

ど青年たちは世の中の仕組みもわからないわけだから、労働学校で勉強していることをそのまま訴えていくことが必要。10人を超えて若いのが固まりになると魅力も出てくる。動労千葉のやっていることを表裏なくわかってもらいたい。



『甦る労働組合』出版記念会にも、平成採の青年組合員が駆けつけて発言した(08年12月23日 DC会館)

水野 90年1月に中村栄一（前書記長）たちが、国
労から動労千葉に加入した。「清算事業団闘争勝利」
を掲げて動労千葉がストライキに決起した時に、国労
はスト破りに応じる方針だったから、「こんなの、
やっていられるか」と言って15人が動労千葉に。あれ
も一つの時代の反映だった。

今もそういう時代。やはり時代の先端を行く人材が
動労千葉に入ってきている。彼らは動労千葉の次を担
う連中だから、大いに鍛えてほしい。

布施 最高指導部がここで緩まないことだよ。で
きるだけ早く2けたにして、勢いをつけることにか
けるべき。今、平成採が動労千葉に加入し始めている
のは、マル生闘争の後に俺たちの世代が伸びたのと重ね
合わせて、いろいろ方針を出せると思う。そういうか
たちで、生かしてもらいたい。

水野 「資本主義の終わりの始まり」と言われる今
だからこそ、時代認識を基底において、労働者一人ひ
とりに「自分の生き様をどうするのか」を問うていく
時代だよ。そういうことを、労働組合としての原則に
のっとってやっけていくべきだと思う。

動労千葉の労働運動とは

■動労千葉の「明るさ」

君塚 今にいたる闘いをいろいろと語ってもらいま
した。そこで、こういう闘いをおしてつくられてき
た動労千葉の労働運動とはどういうものなのかってこ
とを話してほしい。周りの労働者からはよく「動労千
葉は明るい」と言われるけど、どう思う？

繁沢 動労千葉は、明るいけど真剣。真剣にやり
きって、それを乗り越えたから明るい。

勝てなくてもやる闘争というのもある。館山運転区
廃止反対闘争も、最後にストライキに突入して、その
最中に支部解散大会を行い、全員が集まって記念撮影
をした。あの時のみんなの笑顔。あれだと思う。真剣
に闘い抜いた結果、自然にあの笑顔になった。だから
あの闘いを「大勝利した」と総括できる。

突き抜けて闘いきつたら、労働者は明るくなる。国

鉄分割・民営化、シニア制度をめぐる闘い、安全運転闘争、みんなそう。終わってみればみんな明るくなっているのは、やってきたことが間違っていなかったことの証明だと思う。

水野 俺は鴨川支部の歓送迎会や新年会にずっと参加している。鴨川支部は元は勝浦支部から行った連中が中心だから、俺も気が知れている。そこに今度、館山運転区が廃止になって、館山支部の組合員の半分が来た。

お互いにそんなに付き合いがあったわけじゃない。だけど一緒にあって、明るく和気藹々あひあひとやっている。二つが一緒になっても全然違和感がない。やはり組合員同士に信頼感があるからなんだ。動労千葉の組合員という共通基盤に基づくお互いの信頼感じゃないかなという感じがする。

ほかの組合だったら、10人も集まれば、あっちのグループ、こっちのグループと分かれて仲違いしたりするでしょう？ 動労千葉にはそういうものが全然ない。支部はあっちこっちに点在するけれど、そういう意味での共通基盤、お互いの労働者としての信頼感が

ある。だから明るい。そんな気がする。

長田 「動

労千葉で今まで一緒にやってきた」という根っこがある。動労千葉だって最初から「どんな攻撃とも、あつからかんと明るく闘ってきた」というわけではない。はっきり「こうだから動労千葉は明るいんだ」と言え



「館山運転区廃止反対！」 ストライキのただ中で、館山支部解散大会を開催。運転区は廃止されたが、組合員の表情は明るい（07年3月18日）

ないけれど、御用組合だったところから青年部運動を始めて、革マルとの闘いもあって、そういう闘いの積み重ねの中でできてきた下地があるのかな、と思う。

■職場の格闘の中からつくられる団結

長田 館山運転区の廃止反対闘争も、当初は、「廃止されるのは気に入らないから闘争は一発やるにしても、どっちみち廃止になるんだろ」というあきらめムードが蔓延していた。「地域ぐるみの反対闘争をつくろう。地域をオルグしよう」なんて言っても、「そんなことはできないよ」という雰囲気だった。

それがなぜあそこまで団結した闘いに発展したかと言ったら、組合員一人ひとりと膝をつき合わせて、闘いの意義、これからどうなるのか、等々をとことん議論したから。それで「そうか、じゃあやろう」となった時に、初めて明るくなった。

田中 当初は会議をやってもあきらめムードで、何を訴えても全然反応がなかった。だけど何回も議論すると、うちの組合員は「闘って初めて団結を守ること

ができる」ってことはすぐよくわかる。それで実際に行動を始めたら、一気にまとまった。

長田 07年3月の運転区廃止を目前にして、JR千葉支社が2月に内房線にSLを走らせて、館山駅で大イベントをやった。その当日に抗議行動をやったら、ほんの数日前に決めた方針なのに全支部から約80人の組合員が集まった。館山支部の組合員は、「こんなに来てくれた」って相当空気が入ったよね。

廃止反対であれだけの闘いをやったから、次の職場に行っても職場でガンガン闘い出した。動労千葉を解体して当局主体の職場支配をつくるという当局の狙いを、一気に覆した。

言いたいことは、「明るさ」と言われるものも、簡単にできているわけじゃない、ってこと。一つひとつの積み重ねの中で生まれてくるんだよ。

うちの組合員も、一人ひとりは特別な労働者じゃない。はつきり言って結構わがままでし、遊び人だし、酒は食らうし、ギャンブルもやるし、ごく普通。物販でいろんな組合を回ると、うちの組合よりよほどしっかりしていると思う人がいっぱいいますよ。動労千葉

の組合員は、周りから言われるほど特別の人間でもないし、むしろ周りが持ち上げすぎって感じ。

田中 そのとおりで、動労千葉の組合員は普通の労働者。だけど闘いの積み重ねをとおして、「俺たちは労働者だ」というスタンスだけは揺るぎなくはつきりしている。だから明るくなれる。

山口 組合員がみんな、「『動労千葉』の看板を背負っている」という意識を持っている。だから当局に痛めつけられても、人になんと言われようとも、「俺は一人じゃない。仲間がいるんだ。動労千葉の組合員みんなに守られて生きてるんだ。だから動労千葉の看板を背負って生きていく」と。いくら差別されようが、何十年も頑張ってきた。だから、明るくやっつけられる。

田中 そのへんの仲間意識、組合員同士の信頼関係。それと、時代認識を繰り返し提起していること。

うちの組合員は、もの見方はすごい鋭い。だからふらふらしない。

長田 確かに鋭い。俺も外の集会で発言することもあるけど、組合員の前でしゃべるのが一番大変。外の

集会では、適当なことを言っても何とかなる。うちの組合員の前では、下手なことを言えない。

君塚 ごまかしがきかない。

田中 口先だけじゃ通用しないからね。

布施 役員だけじゃなくて、全員が参加する闘争という形をずっと追求してきた。だから、感覚も鋭くなるし、組織に対する信頼感も生まれる。

中野 やっぱりうちの組合員は明るいよ。醸し出すものが明るい。それは一言で言えば、闘っているからだよ。

君塚 闘っていると、労働者って明るくなるんだよ。だって闘っていると、ストレスをためることがない。攻撃しているんだから。

中野 俺たちは不正と闘っている。逆に、闘っていない労働者は、「不正だ」と思っても闘わずに屈しているってこと。真正面から闘っていけば、その労働者自身が解放される。否応なしにそうなる。

田中 民主労総ソウル本部から、「なぜ動労千葉はそんなに明るいんだ」と言われている。「肯定の力」なんて言われて。08年11月末に再度来日したハイテッ

クRCDコリアの女性労働者は、「ソウル本部の部長に、『動労千葉の肯定の力を学んで帰ってこい』と言われた」と。例えば厳しい情勢の中でも「危機はチャンスなんだ」ととらえる見方なんかも含めてのことだと思う。

「動労千葉の肯定の力は、どこからきているんですか」と聞かれて、「暗く闘っても明るく闘っても、結果はそんなに変わらないんだから、明るく闘った方がいいんじゃないですか」と言ったら、「そういう考え方ができるんですね」と言われた。(笑い)

■労働運動は人間の生き方

中野 俺もつくづく思うけれど、労働運動というのは、やっぱり価値観なんだよ。

確かに動労千葉は闘う組合だけど、じゃあ動労千葉で闘ったことによって組合員の給料がよくなったのか。労働条件はよくなったのか。別にいいことは何も無い。だけど動労千葉の組合員には、現役だろうが退職しようが、いつまでも付き合える仲間がいる。そう

いう人間関係や、人間としての高みみたいなものを獲得してきた。

国鉄分割・民営化の過程で40人も首を切られた。その前の、水野さんや布施なんかも加えると、1980年代だけで46人が首を切られている。それだけの人が解雇されたら、ダメージで組織がガタガタになってもおかしくはない。

しかも解雇者を外に働きに行かせたり、本部の専従役員にしたりしたから、各支部は代わりに支部役員をつくらなくちゃいけない。そうすると当局はまた、新役員を強制配転する。また役員をつくる。「一体どこまでもつのか」という局面もあった。

館山運転区廃止反対闘争の時の支部役員だった、初めての経験だった。だけど今じゃ、10年も20年も組合役員をやっているみたいな顔をして立派なことを話す。これを見ていて、「労働組合というのはこういうことじゃないか」と強く感じた。

あらためて思ったけど、組合運動をとおしてみんな、成長してきた。一人の労働者としての成長ぶりとは全然レベルが違う。そうやって、カネなんかには換え

られない、非常に貴重なものをみんな獲得したんじゃないか。そのあたりを、もう1回みんながわかってくるといういなあという気がするよね。

水野 うちの組合員はすごく質が高い。この本質をきちっとつかむ。だから納得するのも早い。

それはやはり、動労千葉の中で学習会を倦まずたゆまずやってきているから。敵の攻撃、現状、それにぶつかっていく組合の方針はどうか。徹底的に組合員の中で議論し、その中で闘争方針を決めて、その方針を貫徹している。その積み重ねの結果なんだよ。

そういうことがほかの労働組合にはない。何回も言うようだけど、こういう動労千葉の原則的な運動を、若い人たちにぜひ受け止めてもらいたい。

中野 労働組合というのは、ただそこに集まれば何かうまくいく、なんてものじゃない。特に資本主義社会は人間を悪くしちゃうから。労働運動を闘うことをとおして初めて、資本主義の中でつくられた悪い傾向を克服して、仲間との本当の連帯や団結を獲得していくものなんだよ。

JR東労組や国労の組合員には今、労働者としての

連帯感なんてないと思う。動労千葉の組合員には間違いないがある。労働組合運動を一生懸命やって、強い組合をつくれれば、こういう人間関係ができるということだけは示してきたと思う。これは何のものにも代え難い宝物だよ。

■あたり前のことを組織として実践

君塚 動労千葉はやはり、革マルはもちろん、協会や革同とも全然違いますね。

布施 動労千葉がやったことは労働組合としてはあたり前のこと。それはつまり、組織的に実践したかどうかということ。学習会だけで言っているだけじゃなくて、学習会で言ったことを実践してきた。

昔から多くの労働組合が労働学校をやってきたけれど、党派を問わず、「情勢が厳しくなったら、最後は役員を降りろ。いざとなったら逃げ出せ」なんて教えるところはどこもない。だけど国鉄分割・民営化の過程では、革同も協会もみんな活動家が逃げた。革マル

は逃げただけじゃなく、当局の手先になった。言ってきたことと全然違うことをやった。一番先に自分が首を切られる立場から逃げるなんて、これほどの裏切りはない。

田中 あの時の現場には、「あんなふうにはなりたいたくない」という見本がいっぱいいた。実際、職場で協会や日共は、言い訳と泣き言しか言わない。「こういう現実だから仕方がない」と。今の4者4団体だってそう。「それは違うだろう」とずっと思ってた。なぜ言い訳ばかりして逃げ出すんだよ、と。

布施 学習会で口先で言うのは簡単だけど、分割・民営化という大攻撃にぶつかった時に、「これと闘う」という方針は、本物の確信がなければ出せない。総評だって、75年のスト権スト以降はまともにストライキもやっていない。組合員を動員するのはせいぜい集会まで。何よりも職場で闘ってない。重大な攻撃はいっぱいあったけれど、「組合役員は出世コース」みたいな感覚で、そこに成り上がるためのポスト争いばかりしていた。

千葉の県労連も、会議の後にゴルフをやることを前

提にして会議日程を決める。俺や山口さんみたいにゴルフをやらなくて帰ってくるのは何人もいない。海外旅行にも行ってた。

中野 清算事業団に1047名が解雇された後、^{*}岩井章さんが聞いてきたよ。「国労は千人も首を切られても、幹部はまだゴルフをやっている。動労千葉もやっているのか?」と。「うちはやらないですよ」と答えたら、「そうだよな。国労はまだやっているんだから、どうしようもないよな」と言っていたよ。

布施 労働組合というのは金が集まる。革マルだって、JR総連という5万人の組合があれば、フィリピオンや韓国に行って悪いことをする金ができる。国労もそうだったし、自治労や日教組もそうでしょう。だから原理・原則を守らないと、腐敗・墮落が極まる。松崎は組合の金でハワイに別荘を買ったそうだけ

※岩井章 1923〜97年。国労甲府支部委員長、国

労本部共闘部長、企画部長を経て、55年の総評大会で事務局長。70年に総評事務局長を退任した後は、国際労働運動研究協会、労働運動研究センターをおこし、右翼労戦統一に反対。全労協結成を提唱。

ど、日教組やほかの労組幹部だって、不正が暴かれたことは多くある。松崎の腐敗ぶりはひどいけど、ほかの組合幹部も同じレベルで腐っていたよ。

中野 確かに労働組合というのは金を使うのが商売だから。儲けなくともいい。使えばいい。例えば1人の組合員が1カ月に5千円を年間12回払ったら6万。それが1万人いたら、6億円になる。動労の当時だって、組合員5万人で年間予算は50億と言っていた。

布施 動労はほかの組合より組合費が高いと言われていたけど、もっと大きい10万人単位の組合は規模が全然違う。しかも共済とかいろいろな金がある。

水野 三役になれば、機密費や交際費、自由に使える金がボンボンとついてきた。

中野 動労千葉はこの程度の組織だから、大したネコババもできないけれど、それだってやる気になればできる。だけどそれをやっちゃおしまいだ。

国労は今、全国で1万人ぐらい。それでもまだ幹部たちは銀座のクラブで飲んでいるという。しかもスト基金の徴収をやめて、各エリア本部に配分することを決めた。国労を解散した時に持ち逃げする準備をして

いる。党派のカネにするってことだよ。

布施 動労千葉の役員はそういうことと無縁だったから、組合員が信頼した。口先だけなら、どの党派も同じようなことを言う。だけど実際にやることは何なのか。そこで、信頼が本物になるかどうかが決まる。

中野 口で偉そうなことを言っても、その人間がどういう人間かということを、労働者はちゃんと見ている。労働組合運動というのは、日常的に圧倒的に労働者と接している。特に今までは終身雇用制だったから、国鉄に就職したらみんな、ほぼ60歳までいた。

そうすると、どういう人間かなんてことはわかる。どこで飲んでるか、どうやって遊んでいるかなんてことも、普段から付き合っていれば隠しようがない。隠し事をしようとしても、そんなものはすぐに見抜かれる。だから、口先だけでうまいことやるなんて無理なんだよ。労働者は、恐ろしいほどちゃんと見ている。労働組合の活動家は、そのことをなめちゃだめだ。

布施 組合員は自分が正しくないと思ったら、昨日まで賛成していても明日になったら反対する。そういう意味でスタンスがちゃんとしている。判断の基本

は、自分の生活が成り立つかどうか。昇給や昇進なんかしなくてもいいわけ。そんなことよりもっと切実なのは、クビになりそうだとか、事故の当事者になった時に、本当に守ってくれる組合かどうか。そこで労働組合を信頼するんだよ。

水野 今、国労は本部や地本の委員長や書記長になると、現場とは賃金体系が違うんだろう？

田中 形式上は一応、「貨物並み」。

水野 勝浦出身のある革同幹部は、職場にいた時はえらく安い賃金だったのに、国労千葉地本の副委員長になったらボーンと上がった。地方本部でもそうだったんだから、中央に行けばそれなりの別の賃金体系があつて、賃金も上がった。国労では、組合の役員が「偉い人」になっちゃつた。

でも動労千葉には、そんな人間は一人もない。専従者は現場の賃金と同じだから、かの中野洋も、専従の書記長になつてもペーパーの運転士の賃金しかもらつていない。しかも現場にいた時に処分をくらい続けたから、同期のほかの運転士よりも安い。動労千葉の役員は、当人も組合員もみんな、偉い人とは思つて

いないもんな。

布施 郵政の幹部だつてやっている。鳥取で最近、かんぽの宿を1万円で購入した業者が6千万円で転売したと。民営化というのは、裏ではそういう儲け口がいっぱいある。国鉄分割・民営化をめぐつても、裏ではとんでもないカネが動いている。組合幹部まで、そんなことにかぶれていたんだから、どうしようもない。その典型が松崎だ。

■資本主義の危機の時代にこそ問われる真価

水野 結局は、労働組合の問題と言っても、党派の問題なんだよ。共産党にしても社会党にしても協会派にしても。国労と言っても、無色の国労なんているわけじゃない。俺に言わせれば、そういう党派の連中がみんな逃げちゃつたつてことなんだよ。

布施 労働運動の歴史を見ても、現場の一般の労働者が逃げたつてことはあまりない。そうじゃなくて、組合の幹部役員ほど逃げていった。

1960年代から70年代半ばまでは、日本経済は右

肩上がりの成長を続けてきた。そういう時代には、労働組合が華々しい要求を掲げることもできたし、モノを取ることもできた。そういう時には「社会主義だ、共産主義だ」と勇ましく言ってきた連中が、国家総がかりで攻撃してきたら、率先して逃げた。

中野 1974年の春闘では、総評は30%以上の賃上げをかちとった。それが74〜75年恐慌を受けて、世界経済も日本経済も停滞に入る。この経済状況と、総評労働運動がダメになっていった過程は、完全に重なっている。75年のスト権ストが「最後のあだ花」で、それ以降はほとんどストライキもない。80年代に入ると「右翼労戦統一」へと急速に動き始めて、今の連合にいたる流れができる。そして分割・民営化攻撃には一矢を報いることもできず、結局は分割・民営化強行後の89年に総評解散―連合結成にいたった。

資本主義がまだ経済成長を続けていた時代には、「マルクス主義」「社会主義」を掲げる勢力はいくらでもいた。その化けの皮が、分割・民営化攻撃の中ではげた。そのことをとおして、日本のほとんどの左翼が掲げていた「マルクス主義」は完全に偽物だったこ

とをさらけ出した。資本主義がぶつつぶれるかどうかの危機に直面した時に、本物の階級的労働運動を貫くことができるかどうか。これが核心問題だ。

毎年11月に全国労働者総決起集会を呼びかけている3労組は、三つとも、この70年代後半以降に闘いを貫いてきたところに共通項がある。



「国鉄分割・民営化絶対反対！」 第1波ストの20人解雇を弾劾し、第2波の24時間ストライキに立つ（06年2月15日 千葉運転区）

布施 組合運動を始めたころ、職場で50歳代の先輩に「30歳を過ぎてやっとな戦争から帰ってきて、まだ子どもにだって金がかかる。なのに、なんでお前らの言うことを聞いて、クビになる心配までしなくちやいないんだ」と言われたことがある。

中野 上の世代の人たちは、みんな暗かったね。死を経験しただけじゃない。労働運動の中での裏切りも経験しているから。

布施 あの世代の人たちは、戦後労働運動の高揚期もレッドパージも見ている。国鉄でもゼネストをやるうとなつて、共産党の主導で現場組合員も立ち上がった。「これは何とかなるのでは」と思ったら、一気につぶされた。その後はレッドパージで主だった活動家がいなくなった。職場で昨日までは偉そうなことを言っていた人間が、ころっとひっくり返ったことも見ている。そんなことにさんざんほんろう翻弄された。

中野 レッドパージの時には、共産党の活動家だった人間が、クビにならないために、職場の掲示板に「私は本日、日本共産党を辞めました」という張り紙をした。千葉でもそういうことがあったそうだよ。そ

うというのが職場にまだゴロゴロいて、現役で乗務していた時代だった。

布施 「誰々は共産党を辞めたやつなんだ」という話もよく聞いた。「あの野郎、旗を降って、人のことをなじってきたくせに、辞めやがって」と。だから「赤旗だって『日の丸』だって、旗を振っているやつは結局同じだ」と言うわけ。そこにまた俺たちが出てきて、「そんなに簡単に信用できない」と思ったというのは、ある意味で当然。「組合の言うことなんか聞くな」と言うのも、ものすごくリアリティがある。

中野 そんなことを見ていたら、明るくなつてなれるわけがない。

布施 俺にそう言った人も、暗かったよ。それは競争に行つたからというだけではない。労働運動の中で裏切られた経験をしているから。気動車区の外勤や内勤、指導員をオルグしようと思つて行くと、そういう話をいっぱい聞いた。こっちはまだ20歳代。それを説得する論理はなかったよね、実際。

重大局面迎えた国鉄1047名闘争

君塚 09年4月で国鉄分割・民営化から22年。あらためて国鉄労働者1047名の解雇撤回闘争が重大な局面を迎えています。

田中 僕は今の1047名闘争の現実について、率直に言って悔しくて仕方がない。国鉄闘争は、日本の労働運動において空前の支援を受けてきた闘いだ。にもかかわらず、この無様な姿はなんだ、と、腹の底から煮えたぎる怒りでいっぱい。

08年10月、4者4団体が主催して日比谷野音で行われた10・24全国集会は、異様な光景だった。正門は封鎖、裏口から入る時も主催者が「面通し」して、4者4団体路線に反対する労働者は排除する。国労闘争団員が警備をしていたけれど、その前に立っているのは機動隊。「これが一体、労働組合の集会なのか」と。

だけど今の現実には、労働運動がぐぐり抜けなければいけない勝利に向かっての試練だ。そういう意味で、

2・16集会で動労千葉が「1047名闘争の再出発」を宣言したことは大きな意味がある。

同じ2月16

日、4者4団体は永田町の星陵会館で集会をやった。星陵会館にしたのは、

公明党や民主党などの国会議員を集めるため。労働者の団結に依拠するのではなく、議員にすがって「1047名闘争の解決」を嘆願するものだ。現場の1047名の仲間は一切どこにいったのか。こんなもの労働運動じゃない。

繁沢 今この状況でなぜ引くのか。国労本部だけでなく、国労闘争団までがなぜそうなるのか。悔しい



800人を集めて開催した「1047名解雇撤回！09春闘勝利！2・16労働者総決起集会」

し、情けない。国労闘争団の人には、「この20年は何だったのか。あなたがたの人生はそれでいいのか」と率直に聞きたい。

だけど問題はそれだけじゃない。4者4団体が闘争をやめて和解に突っ走るために、動労千葉を排除してくるのは余計に許せない。自分たちが闘いたくないものだから、闘う勢力を排除する。しかも闘争団も一緒にそうなっているのが余計に許せない。

もちろん動労千葉は勝つまで闘うけれど、自分たちだけで頑張ろうという立場ではない。一緒に闘う仲間を必死で組織しようというスタンス。こうなってくるとなおさら、動労千葉がブレちゃいけないと痛感するけれど、今のところは怒りが先に立つよね。動労千葉争議団のみんなもそう。

中野 今の1047名闘争をめぐる攻防は、敵にとっては、分割・民営化攻撃に最後の決着をつける攻撃だ。1047名闘争はやせても枯れても国鉄分割・民営化反対闘争の継続なわけだから、敵の側は「あの闘いを終わらせなくてはならない」と考えている。

国労闘争団と全動労争議団が和解したいなら、勝手

にやればいい。決着つけて終結を宣言すればいいんだよ。そうなくても、動労千葉がやることというのは、せいぜい「断固反対」とか書いた『日刊動労千葉』を出すくらいなんだから。

だけど、やれない。そこがミソだな。

権力にとって1047名闘争をたたきつぶすということは、闘いの芽をすべて摘み取らなければ意味がないわけだ。動労千葉が残っては意味がない。国労の中に闘う勢力が残ってしまったては意味がない。そして、動労千葉とともに闘う全国の労働者もすべて、完全にたたきつぶさなければならぬ。

今の4者4団体と和解決着しても、動労千葉が闘い

※4者4団体

国労闘争団全国連絡会議、鉄建公団訴訟原告団、鉄道運輸機構訴訟原告団、全動労争議団の4者と、国労、建交労、国鉄闘争支援中央共闘、国鉄闘争共闘会議の4団体。06年に国労闘争団、全動労争議団、動労千葉争議団を含めた「被解雇者1047名連絡会」が結成された直後から、動労千葉争議団を排除し、「解雇撤回」の要求を引き下ろして動き始めた。

ぬく限り、そうならない。だから、政府の側は簡単に動かない。1047名闘争をめぐる攻防は、道州制や民営化が焦点になった今をめぐる攻防なんだ。だから逆に言うと、ここでもう一回、分割・民営化攻撃をすべてひっくり返す可能性だってある。ものすごく展望のある闘いだ。

にもかかわらず、「動労千葉が妨害しているから解決しない」などと言う。ウソを言うんじゃない。われわれは妨害などしてない。そもそも、彼らが動労千葉も含めて何か決めたことなんて一回もないんだから。

山口 だけど本当にそんな状況で、相手側は解決に乗ってくるのかね？

田中 今は公明党頼み。その理由は、公明党が「国鉄労働者1047名問題解決のための対応委員会」を設置したから。そんなことで道が開けると思ってるのか、と聞きたいよ。

動労千葉は「解雇撤回の原則を絶対に投げ捨ててはならない」と言っているだけ。機動隊の手を使って「解雇撤回」を掲げる人間を排除する解雇撤回闘争って何なのか。

中野 国労闘争団の一部の幹部が動労千葉に言ってきたことは、要するに「解雇撤回を主張したから、動労千葉を排除する」ということ。彼らは、「解雇撤回」という要求なき解雇撤回闘争をやるうとしている。それで、「いつまでも解雇撤回を下げない動労千葉は、革命運動と労働運動を一緒にしている」と言って、機動隊まで導入して動労千葉を排除する。

この動きが今後、どう収まるかはわからないけれど、せいぜい500万円か1000万円。国労組合員として分割・民営化で首を切られてから20年間、必死で闘ってきた一人の労働者として、そんな人生でいいのか、と言いたくなる。

田中 分割・民営化反対闘争については結構、華々しいところを取り上げられる。だけどこの二十数年間の闘いは、革マルはもとより、協会派や日共、こういう連中との労働運動の内部での闘いだったということをつかんで欲しい。4者4団体についても、「今さら始まったもんじゃない。こんなところに行き着くのはあたり前だ」という気持ちもある。動労千葉はそういう連中と必死になって格闘して、原則を守り、団結を

守ってきたっていうことを、ちゃんと見て欲しい。

繁沢 動労千葉と国労が違うなあと思うのは、国労は闘争団も含めて、国鉄闘争の話以外しない。動労千葉は国鉄闘争だけでなくいろいろな闘争に出ていくし、その中でつかむことも多い。だから労働運動をめぐって全体で起きていることを考えながら闘う。そういうスタンスがそもそも全然違う。

1047名闘争は自分たち国鉄労働者だけの闘いじゃない。今、国鉄分割・民営化型の攻撃が全労働者に広がっているわけで、その全体の中でどう闘うべきか、つてことが大事だと思う。でも国労はそういう発想をしないんだよね。

水野 今になって、1047名闘争を4者4団体でやっているのは、やつらの本性がまた出てきただけ。そういう連中なんだから、それは乗り越える対象であつて、これはしょうがない。しょうがないと言つて放り出すつもりはないけれど、本質的にそういうもの。分割・民営化の当時と同じ。俺はそう思うよ。

布施 協会派も口ではいくらでも原則論を語ってきた。だけどいざという時に誰もいなくなった。そうい

う歴史が、今の状況をつくり出した。当時の社・共や総評の中では「一番戦闘的」と言われていた国労だけど、やはりあの時にちゃんと闘わなかったから今、4者4団体に行き着いた。日本の左翼の時代認識や思想的立脚基盤がいかに脆弱か、という象徴だ。

水野 それを今になって、「動労千葉は過激な組合だ」みたいな言う連中には、「何を言つてやがる、お前らがずっこけやがっただけじゃないか」と言つてやりたい。俺だって市議選の時には「過激派」とか言われるけど、全然構わない。「俺は過激派組合の代表だ」と言っているんだよ。

中野 今あらためて、原点に返つて、「国鉄分割・民営化とは何だったのか」ということをはっきりさせるべきだと思つている。

今、動労千葉と国際連帯闘争をやっているアメリカや韓国の労働者はみんな、「国鉄分割・民営化に対して唯一ストライキで闘つて、今なお闘い続けている動労千葉と、われわれは連帯するんだ」と言う。それはそれぞれ、この攻撃こそが全世界で労働者に対して吹き荒れる攻撃の核心だと考えているからだ。

長田 動労千葉の闘いは、日本の情勢を全部動かしたんだよ。国鉄分割・民営化によって労働者に総攻撃をかけて、「それで改憲まで行く」と中曽根がはっきり言った。だけどこんな小さな動労千葉が分割・民営化にストライキで立ち上がったから、国労も残ったし、1047名闘争が続いてきた。分割・民営化からもう22年もたっているんだから、国鉄闘争がなければ、憲法9条なんてとっくになくなっていく。こういう事態をつくり出したんだから、動労千葉の闘いも大したものだと思うよね。

中野 郵政を民営化するにも、20年もかかった。

君塚 それでも、動労千葉の闘いの歴史って、前面に出したくない人たちがいまだに大勢いる。

布施 みんなで黙殺しようとしている。今だって、国鉄分割・民営化についていろんな人間が書くけれど、動労千葉のストライキのことは絶対に触れない。

中野 動労千葉の闘いのことを書いたら革マルに攻撃されるんじゃないかとビビっている。

田中 政府・財界が今、道州制で自治労・日教組をつぶそうと攻撃しているけど、これだって国鉄分割・

民営化反対闘争がなければ、とっくの昔に進んだ話。

22年たって、分割・民営化が労働者全体にとつてどれほど重大な歴史的転換点だったのかということがはっきりした。戦後最大の労働運動解体攻撃であり、ここから新自由主義攻撃が始まった。そして今や、それも破綻した。

そういう中で支配階級が今、国鉄闘争を最終的にたきつぶそうとしているのは、ここを突破しないと支配階級も次に進めないから。究極の民営化である道州制導入は、1047名闘争を解体しないままではできない。逆に労働者の反撃が巻き起こりかねない。

世界大恐慌の現実の中で、1047名闘争が本当に勝利できる時がきた。1047名闘争が、今首を切られ、苦しんでいる労働者の先頭に立って、「労働者は全部、この旗のもとに団結しよう」という旗を掲げること。そうしたら5万人、10万人の怒りの隊列ができる。非和解的激突になることは間違いないけれど、この中にこそ勝利の展望がある。そういう闘いを09春闘に向かつてやりたい。

■革命の封殺に全力注ぐ革マル・松崎

中野 最近、革マル松崎の大裏切りの歴史を覆い隠し、松崎を持ち上げようとする動きがいろいろ出てきている。雑誌『情況』08年12月号で、共労党の樋口篤三は、過去に「動労を革マルとイコールで見ている」ことについて「自己批判する」と述べている。「動

労の動向は30年近く見誤り……痛恨の失敗であった」と。さらに分割・民営化時の大裏切りについても、「組織防衛戦、活動家確保策として『大胆な妥協』という選択はありうる」と擁護している。

70年ころに社青同委員長をしていた山崎耕一郎も、分割・民営化時の動労革マルの裏切りについて「『戦術の選択』は『裏切り』ではない」と言い、さらに「JR総連が言う『ニアリー・イコールの労使関係』論は、これからの連合運動を強化するために、有効な考え方」と言って松崎を持ち上げている。

松崎の「ニアリー・イコールの労使関係」論とは、「労働者と資本家は非和解の関係じゃない。ニアリー・イコールだ」ということ。こんなものを今に

なっって持ち上げることに、ものすごく悪意がある。

田中 資本家がこれだけ労働者の首を切っているのに、何が「ニアリー・イコール」なのか。「労働者階級VS資本家階級」というむき出しの階級間衝突が起きている今だからこそ、この関係を覆い隠すのに必死になっって、松崎を持ち上げている。

松崎明は、自らが主宰する国際労働総研が発行する『われらのインター』09年1月15日号で、こう述べている。「世界恐慌の時代ですから、次は革命か戦争かなんです。革命はできません。簡単に。もう一回戦争する？ 金がなくてできない。どうする。いま、人間の理性が羽ばたくときでしょう」。ふざけるんじゃない。本当に革命か戦争かが問題になる時代になったからこそ、松崎は「労働者を絶対に革命に向かわせてはならない」と必死になっているわけです。

さらに「一五〇六年前にわがJR東労組はドイツその他を訪問してワークシェアリングの研究をした。私はこういう時代が来るのがわかっていましたから、その時に備えて準備する。準備はJR東労組は終わっています」と。ワークシェアリングが意味するもの

は、極限的な賃下げと首切り。その核心は、資本を必死になって救済するということ。松崎は経団連になりかわって、こんなものを「労働組合」の名で労働者に押し付けようとしている。本当に許しがたい。

中野 そんなことも含めて、国鉄分割・民営化について、もう1回きちんと検証することは重要だと思う。松崎はあんなに悪いことをしたやつなのに、やはり20年もたつと忘れちゃうってことがあるんだよ。

松崎・革マルの動きは、やはりまだ不気味だ。なぜかという点、5〜6万人の組織を持って、金をふんだんに使っている。民主労総やポーランドに対して工作するのも、彼らの場合は金だ。国際交流事業を連合の中でも一番やっているのはJ・R総連だからね。国際労働者交流センターなんて機関もつくっている。総額で一体どれほどの金を注ぎ込んでいることか。

他方で、動労千葉は韓国やアメリカに行ったらご馳走になっているけれど（笑い）。ちゃんと闘っているから、金で買収することなど何一つなく付き合っている。だけど革マルは相当、金をつぎ込んでいるよ。

そういう中で、フィリピンの話のように、民営化の

先兵を果たすということがあり得る。それで、J・R資本と結託しようとしている。日本の鉄道会社の中ではやはり旧国鉄、今のJ・Rが一番技術力を持っている。

中国や台湾、韓国などの鉄道事業にどの電車を使うか、どういう技術を使うのかということ、日本の資本にとってはものすごく大きい。

そんなことも含めて、松崎がいろんなかたちで復権を狙っている。これは軽く見ではいられない。

田中 ありうるね。これだけ労働者の闘いがわき起こっているから、資本家どもは、「連合では労働者を支配しきれないんじゃないか」と戦々恐々としている。そういう時こそ、資本家にとって、日本共産党と革マルの存在意義がある。一見すると「労働者の味方か」と思わせて、その実、労働者の怒りを絶対に革命に向かわせない、資本主義の枠内に抑え込むことに全勢力を注ぎ込むのが共産党と革マル。そのためには暴力だって使うのが彼らの本性。だからこそ、ここ最近の共産党や革マルを持ち上げる動きとは本当に対決しなくてはいけない。そうしないと労働者の本物の勝利はないということを痛感する。

労働組合を甦らせる時代がきた

山口 国労が分割・民営化の時に闘わなかったことが結局、今の世の中をつくった。終身雇用制がぶっ壊されて、2000万人もの労働者が非正規雇用労働者になった。大量解雇で大騒ぎになっているけれど、これだけの膨大な不安定雇用労働者の存在は、やはり分割・民営化から始まったことだ。

布施 株主配当は9倍、役員報酬は2倍になっているのに、労働者の賃金だけ下げられて、「食えない」ことが現実問題になっている。

山口 トヨタは1年前まで2兆円の利益を上げて、配当金をバンバン配っていたくせに、全然関係なく、「今年は少し赤字になるから、派遣労働者は切る」と。労働者が品物と同じような扱いをされている。

今、フランスなど各国で、ストライキがバンバン起きている。日本では、これだけ解雇者が増えてきているのに、集会の一つもない、暴動の一つも起きない。労働組合の責任を痛感するよ。

中野 ヨーロッパでは、労働組合がストライキやデモに続々と立ち上がっている。しかし日本の労働組合のナショナルセンター、680万人を組織する連合、120万組織をひょうぼう標榜する全労連は、一体何をやっているのか。ストライキなんて呼びかけもしない。では何もしていないのか。そうではない。重要なことは、日本経団連と連合が1月15日に「労使共同宣言」を締結したこと。経団連と労働組合のトップが「労使共同宣言」を結んだわけだから、次は、各企業の経営者と労働組合が締結することが問題になる。

ただどおもしろいけれど、労働組合の側が懸命に締結しようとしても、資本家の方が嫌がっている。労使共同宣言とは、組合が「ストライキをやりません」と誓うもの。国鉄分割・民営化の時には、動労革マルが労使共同宣言を締結して当局の手先になった。だから、俺たちは「労使共同宣言？ ふざけるんじゃない」と思うけれど、組合が「闘いません」と誓うだけじゃない。資本家の側も「むやみに首を切りません」と約束することになる。資本家は今、とんでもない大量首切りを狙っているから、労使共同宣言なんて結び

たくない。それほど労働組合がなめられきっている。

布施 『甦る労働組合』の旧版は、1995年に日経連が「新時代の『日本的経営』」を出す直前の発行。だけど旧版でも、日本の資本家は労働者の3分の2を不安定雇用にしようとしていることを明言している。だけどそれに対して何の闘争もないまま、財界の意向のままにやられてきた。郵政民営化の時も、組合の中核の考え方は、国鉄分割・民営化当時の国労とまったく同じレベルだと思った。

日本では、全人口の約8割が賃金労働者として飯を食っている。そのうちの7〜8割が中小零細。今は大企業が首切りをやっているけど、本番はこれからだ。これから全体化してくる。

労働組合運動を甦らせていく芽は、確実に今の情勢の中にあると思うけれど、それをどう育てていくのか。そこが大きな問題。

中野 核心は、資本家に対して闘うかどうか。これだけ労働者を解雇しているのは資本家だよ。膨大な労働者の首を切り、家からもたたき出している責任はすべて資本家にある。

にもか

わらず、なぜ資本家に対して怒って闘わないのか。なぜトヨタやキヤノンに怒らないのか。今、労働交流センターが経団連デモをやっているけれど、資本家に対して正面から闘うことが必要だ。

ただで連合をはじめとする労働組合幹部は、資本家に対してはまったく闘わず、代わりに生活保護や雇用



1月から連続して闘われている経団連へのデモ。青年労働者が先頭に立って「御手洗を倒せ！」(2月26日 経団連前)

保険を要求する。資本が引き起こしたことに對するツケを、なぜ税金でやらなくちゃいけないのか。まあ要求していいけど、でも、その前にやるべきことがある。それは、資本家と闘うことだ。

日比谷の派遣村だって、行政ではなく連合や全労連、全労協が、ボランティアの名のもとに「今日はここに行つて寝てください」なんてことをやっている。

それで、労組交流センターが派遣村に集まってきた労働者にビラを配つて、「みんなで労働組合をつくつて闘おう」と呼びかけたら、派遣村の中心の連中に「やめてくれ」と文句を言われた。「せっかく行政に便宜供与してもらっているのに、『闘おう』なんて訴えられると、そういう関係が全部バアになっちゃう」と言うんだよ。「だから、騒ぎを起ささないでくれ」と。みんな、できレースだ。

布施 動労千葉に原則的なことを言われちゃ困るから、陰に隠れて「動労千葉は来ないでくれ」と言ってくる。そんなあり方で、労働者が明るくなるわけがない。労働者は物乞いしているわけじゃないんだ。

中野 だけど、こんなことを続けることはできな

い。これ以上解雇者が増えたら、間に合わない。これから規模はどんどん大きくなっていくわけだから、否応なしに「闘うしかない」つてことになる。

田中 倒産解雇と100日近く自主営業で闘った京品ホテルに対して、1月25日に強制執行が行われた。

その当日、強制執行が入っているのに、全国ユニオンの幹部と裁判所の執行官は、喫茶店でお茶を飲みながら「手荒なことはしない」とかなんとか話していたそうだよ。早朝から執行官が来ているのに、「これから5分間休憩します」なんて言いながらやっている。

長田 そんなことだから、たったの5分間で警察に入られた。情けない。5分で強制執行されたと聞いた時は、あまり早くておかしいと思つたよ。

中野 現場労働者はものすごい怒りと闘う意欲を持っていてもかわからず、それを組合幹部が抑えこんでまわっている。墮落しきっている。

布施 財界の連中の方が、「このままでは労働者が暴徒化するんじゃないか」という危機感を露わにしている。なのに労働組合の側はのほほんとしている。

09春闘だって、経団連の副会長と連合の事務局長が

テレビに出てくると、経団連副会長は胸を張って、「国際競争に勝つためには、賃上げなんてできない」と居丈高に言う。それに対して連合の事務局長が「どうか賃上げをお願いします」と頭を下げる。労働組合の幹部として恥ずかしい限りだ。

中野 そういう中で労働組合が問われている。こういう時に大事なことが二つあると思っているんだよ。

ひとつは、自分たちの中にある体制内のものの考え方と決別すること。われわれ自身が、資本主義体制が永遠なもののような感覚で、物事の発想が体制内になる。とりわけ戦後の労働運動の中では「会社あつての労働者」という意識が根強くはびこってきた。こういう考え方と決別しなければ、「資本主義の終わり」の時代に対応した闘いはできない。

日本の戦後の労働者支配は、「終身雇用制」「年功序列型賃金」「企業内労働組合」の三つを土台にしてきた。俺は率直に思っていたけれど、資本主義でも60歳までそこその賃金を受け取り、60歳を過ぎても年金を受け取って生活できるなら、労働者は革命を起す必要がない。

だけど今、この終身雇用制がぶっ壊された。労働者はみな、先行きを不安に思っている。とりわけ青年労働者は、まったく先が見えない。本当に「食べていけない」時代が始まっている。これは、あえて言えば、いいことだ。だって、労働者が人間らしく幸せに生活するためには、資本主義体制そのものを打ち倒すしかない。労働者が社会の支配者になるしかない。その絶好のチャンスが、今ようやくやく訪れた。

膨大な人たちが、そういうことを真剣に考えざるをえなくなっている。「ロストジェネレーション」と呼ばれる30歳代半ばより下の世代は、戦後民主主義による恩恵を何ひとつ受けていない。だからこの世代の青年労働者は、圧倒的に戦闘的だ。恩恵を受けてきた世代とは、意識がまったく違う。「資本主義はいいもの」なんて思っていないし、「こんな社会のあり方をぶち壊そう」と本気で考えて闘っている。つまり、闘う労働組合運動を圧倒的に登場させていくことができる時代になった。

もうひとつは、労働組合が甦る時代を迎えたからこそ、「労働組合」を名乗って労働者に襲いかかってくる

る勢力が登場している。こういう時代には、こうした勢力と対決して激突にかちぬくことが、ものすごく重要なテーマになってくる。



08年11・2全国労働者総決起集会（日比谷）

もうすでに、その激突は始まっている。とりわけ動労千葉へのバッシングがすごい。国鉄1047名闘争をめぐって今、国労の中の、党派で言えば協会派や日本共産党・革同が、動労千葉を激しく攻撃してきている。

その主張の核心は、労働組合が、危機に瀕した資本主義を必死で救済すること。そのために、真剣に闘おうとする労働者を徹底的に弾圧する。こういう昨今の動きとは徹底的に闘わなくてはならない。「労働者同士なんだから、仲良くやろうや」というスタンスでは労働者は勝利できない。

山口 国鉄分割・民営化の時も、国労や総評は「お願い」というスタンスだった。そういう連中が連合になって、今これだけ首切りが吹き荒れても、集会のこともできない労働組合になったことだ。

中野 これまでも「労働組合が闘うと、会社の経営が立ちゆかなくなる」なんてことはよく言われてきた。だけど実際は、日本で組合の闘いによってつぶれた会社なんて一つもない。

1回、労働組合が会社をつぶすくらいの闘いをやったらいいんだよ。労働組合は本来はそういう力を持っている。実際にやったら、「労働組合というのはこんな力を持っているのか」と多くの労働者が自信を持つと思うね。

青年労働者へ——生き様かけて闘おう

君塚 では最後に、JRの平成採を含めて、青年労働者に向けて一言ずつ。

山口 今はニュースも「何人首切り」とかいう暗い話ばかりだ。動労千葉の現役組合員、そして新しく入ってきている青年労働者、こういうみんなの力を合わせて、暗い世の中を変えてもらいたい。

水野 これからは自分の生き様をかけた生き方をしよう、と言いたいですね。労働者は権力やなんかに幻想を持たないこと。『甦る労働組合』には、「労働者というのはどういうものなのか」ということが書かれてある。労働者としての自らを自覚して、自分の生き様をかけて、道を選択してほしいと思う。

長田 特にJRの青年労働者に言いたいののは、今までのようには行かないことがはっきりしたってこと。それにちゃんと気づいてもらいたいし、その中でどうするのかということを本当に考えよう、と。

今までは、平成採の労働者は、そう深く考えなくても済んだかもしれない。だけど、もうそんな時代じゃない。そういうことを自分の頭でしっかり考えてもらいたい。最終的に判断するのは自分なんだから。そうなってくれば、われわれが青年に向けて訴えている言葉も、一つひとつがよくわかると思う。

田中 「資本主義の終わりの始まり」とは、一体どういうことを意味するのか。誰も経験したことがない時代なんだよ。その中で動労千葉が果たす役割、労働組合が果たす役割はものすごい決定的な位置を持つ。

ここで組織拡大を一つの流れにした時に、そこから新しい動労千葉の可能性が生まれてくる。どんなに大変でも全力を尽くしてやりたい。この時代に本当にかみ合うような闘いをつくっていききたい。

布施 首切りが吹き荒れる時代に入った。そして労働現場で確実に何かが起ころうとしている。この現状に対して、動労千葉に結集する人たちが職場から一戦を起こしていけば、新しい時代状況をつくれる。そういう可能性が、『甦る労働組合』の中には秘められている。

09年団結旗開きに勢ぞろいした青年組合員



仕事をやっていて、思ったことをちゃんと職制にぶつけられる、そういう職場にしくちやダメだよ。それに尽きる。そのために、今日話したことも含めて何かつかんでもらえたら、と思う。当面、最大の問題は組織拡大だし、動労千葉が組織拡大することによってこそ、職場も明るくなる。

君塚 若い人にはぜひ、労働者の自覚を持ってもらいたい。労働者には、無限

の可能性がある。団結すれば何でもできる。少なくとも、明るく闘える。そのことが一番大きいし、すごい財産だよ。それだけでも、勝ったようなもの。その自覚があれば動労千葉に集まってくれると思う。

ここ2年くらいで、団塊の世代からちよつと下ぐらいまでが定年退職を迎える。JRではそれ以降数年間、定年退職者がほとんど出ない。ちょうど国鉄の採用がなかった世代だから。長田書記長たちの世代が退職になるまで約10年近く時間がある。だからこれからはもつと増やしていきたい。

今の労働条件は、過去の闘いの上にある。今日の闘いは、明日の労働条件のためにある。だから、今頑張っているのは若い人のためだということを、若者に向かって一番言いたい。

中野 自分たちのことは、自分たちの責任でやるということ。若い人たちにはそうしてもらいたい。自分たちの責任で自分たちの将来をつくり出さなければダメ。今、そういう時期に来ていると思う。

そのために何をするのか。信頼できる楽しい仲間たちをたくさんつくって、自分たちの正しいと思うこと

をやることだ。そのためには動労千葉に結集してもらいたい。

繁沢 今は大学を出ても勤めるところがない。青年労働者の半分が非正規で、将来に展望が見えない状況にたたき込まれている。その一方で、動労千葉の労働学校で学んだ青年労働者が中心になって「労働運動の力で革命をやるう」と訴えて闘っている。やっぱり今、青年たちに、「元から変えなきゃいけないんだ」ということと、「それをやるのは若い労働者たちの使命だ」ということを知らせたいと思う。

動労千葉がストライキに立ち上がるのも、青年たちに「ここに労働者の展望がある」ということを見せたい、見て欲しいという思いから。動労千葉の闘いをおして、青年労働者にこの時代に生きる展望、社会を変革する展望を伝えていきたい。

君塚 これで座談会を終わります。長時間にわたりご苦勞さまでした。



千葉地本時代の動力車会館